彙　報

二〇〇七年一月より
二〇〇七年十二月まで

研　究　班

中國繪畫の總合的研究　　班長　曾布川　寛

中國繪畫の資料は、發掘に基づく古代・中世作品の出現、傳世する近世作品の公開などによって、近年ますます增加の一途をたどっているが、多くは未消化のまま放置されているのが現狀である。本研究班は可能な限り資料を收集し、樣式論、圖像學、畫論、技法はもとより、パトロン、蒐集などの觀點から考察し、更に書法・篆刻、詩文などの面からのアプローチも加え、總合的な研究を試みる。今年度は人文研アカデミー・連續セミナーにて、「東西交流の主役　ソグドの美術と言語」と題し四名が特別發表したほか、班員及びゲストスピーカーによる研究發表は、以下の通りである。

一月二九日　「形」についての考察　宇佐美文理
三月　五日　彬縣大佛寺石窟大佛洞造立年代について―貞觀創建說に對する再檢討―　張　南南
三月一九日　趙孟頫筆「紅衣羅漢圖卷」について　西尾　歩
四月二八日　高劍父と京都畫壇　西上　實
　　「山東省の佛像」解說　片山　寛明
五月一四日　『古今著聞集』と中國畫論　河野　道房
五月二一日　帝釋天善見城攷―眞諦譯『佛說立世阿毘曇論』について―　外村　中
六月一一日　『劉雪湖梅譜』と文人ネットワーク　小林　宏光
六月二五日　竹田畫帖における構圖の特質―《亦復一樂帖》・《船窓小戲帖》を中心に―　吉村富美子
　　瀟湘八景圖の順序を巡って　吳　永三
七月　九日　唐代の海圖について（續考）　竹浪　遠
九月一七日　「上海―近代の美術―」解說　弓野　隆之
一〇月一五日　ガンダーラ塑像の研究―人文研所藏資料の再檢討―　向井　佑介・下垣　仁志（共同發表）
一〇月二九日　廣元皇澤寺第二八窟試論　金　銀兒
一一月一二日　安伽・史君墓中の宴飲圖　齊　東方
一一月二六日　河清元年（五八二）銘像からみた中國・北朝期河北地方の造像傾向　徐　男英
一二月一〇日　元末四大家の繪畫研究序說―黃公望と倪瓚―　曾布川　寛

西陲發現中國中世寫本研究　　班長　高田　時雄

一九世紀末以來、敦煌・トルファンさらに東トルキスタン各地の遺蹟から數多くの寫本が發見された。しかし、これらの寫本の研究は、資料の公開整備が格段に進んだこと、寫本研究の方法が嚴密化したことなどにより、近年全く新しい段階に入ったと言える。本研究班では、漢文寫本を中心とし、歷史・宗教・言語・文學など樣々な角度から檢討を加え、西陲發現寫本の總合的な研究を展開する。なお昨年度の報告は『敦煌寫本研究年報』（創刊號）として刊行された。

二〇〇七年四月より一二月までに行われた研究發表は以下の通り。

四月二三日　敦煌石窟畫塑材料中的麵粉和油　高　啓安
五月　七日　『現在十方千五百佛名竝雜佛同號』（敦研〇六八號背面）について　山口　正晃
六月　四日　フランス國立圖書館所藏のナム語文獻　池田　巧

六月一八日　『文場秀句』小考―「蒙書」と類書と作詩文指南書の間　永田　知之

七月　二日　流動するテキスト―敦煌寫本成立の一例　高田　時雄

九月一〇日　長興四年中興殿應聖節講經文（P.三八〇八）をめぐって　松浦　典弘

薩布試解　王　丁

一〇月二三日　吐魯番アスターナ第三四一號墓（六五TAM三四一）出土「景龍三年一一月南郊赦文」研究　辻　正博

李盛鐸舊藏『摩訶衍經』卷第八の文獻學的考察　落合　俊典

一一月一九日　大乘菩薩戒と密敎―S二二七二V「金剛界大毘盧遮那佛攝最上大乘秘蜜甚深心地法門傳受蜜法界大三昧耶修行瑜伽心印儀」を中心に　齋藤　智寛

ペリオ將來『佛說（天地）八陽神呪經』に關する調査報告　玄　幸子

一二月　三日　大和寧國藏の華嚴經について　赤尾　榮慶

俄藏敦煌本『新集文詞九經抄』と法藏敦煌本『新集文詞敎林』に關する二・三の寫本學的考察　米田　健志

一二月一七日　美國哥倫比亞大學東亞圖書館所藏敦煌文獻小考　余　欣

西州百姓遊擊將軍石染典と六胡州の關係について　中田　裕子

漢簡語彙の研究　班長　冨谷　至

二〇〇七年も、從來と同じく『居延漢簡釋文合校』を主要なテキストとして、圖版および『居延新簡』、『敦煌漢簡』等の他の邊境出土簡牘を參照しつつ、漢代西北邊境出土簡牘史料中の語彙を收集し、その語義を確定した。

擔當者および擔當範圍（『居延漢簡釋文合校』の簡番號）は次の通り（敬稱略）。

冨谷　至…七・六～八・六

杉村伸二…八・七～一〇・二

宮宅　潔…一〇・三～一〇・三〇

角谷常子…一〇・三一～一一・一二

佐藤達郎…一一・一三～一三・六

鷹取祐司…一三・七～一四・二二

米田健志…一四・二三～一五・二五

森谷一樹…一六・一～一八・五

井波陵一…一八・六～一九・二〇

本研究班にて確定させた語彙數は、二〇〇七年末の時點で、のべ一二五五項目となった。

また、一月一九日には、徐世虹（中國・中國政法大學）・金秉駿（韓國・翰林大學）兩氏による研究報告がなされた。題名は次の通り。

說〝正律〟與〝旁章〟　徐　世虹

漢代聚落分布的變化：墓葬和縣城的距離分析　金　秉駿

傳統中國の生活空間　班長　田中　淡

中國の傳統的な生活空間および造形、すなわち具體的には住まい、宮殿、庭園、あるいは家具配置、室內空間、日常生活と儀禮等々の諸相をとおして、その特質を探る。時代・地方を限定せず、また建築空間に限らず、廣義的な意味で日常あるいは儀禮の生活空間を對象として、中國學の關連分野および東アジア、周邊地域の專門家の參加を得て、多樣な研究主題をとりあげてゆく。研究發表と併行して班員共通の會讀テキストとして、明・方以智『通雅』宮室をとりあげる。

二月二七日　『通雅』卷三八宮室　高井たかね

四月一七日　An Exploration into the Residential Environment in Tang Chang'an 唐長安城CG復元研究（CG併映）　王　才強 Heng Chye-Kiang

四月一七日　元大都の皇城における庭園　福田　美穗

五月　八日　インド佛敎の庭園デザインと古代中國の庭園　外村　中

五月　八日　『西遊補』の庭園・建築群　大平　桂一

六月九日～一〇日　國際シンポジウム「傳統中國の庭園と生活空間」（於京都市勸業館みやこめっせ　後援：日本學術振興會、（財）國

際花と緑の博覽會記念協會）
六月二六日　見學會　舊秀隣寺庭園
一〇月　九日　『通雅』卷三八宮室　罘罳
高井たかね
一〇月二三日　『通雅』卷三八宮室　罘罳
高井たかね
一一月一三日　遼代佛塔の諸問題―朝陽北塔の歴史・構造・思想―
向井　佑介
一一月二七日　四川・雲南古建築調査（スライド併映）
福田　美穂

二〇〇七年六月九日～一〇日の兩日、本研究班が中核となって企畫運營した國際シンポジウム「傳統中國の庭園と生活空間」（於京都市勸業館みやこめっせ　後援：日本學術振興會、（財）國際花と緑の博覽會記念協會）が開催された。この種の主題を掲げた國際シンポジウムは史上初の試みであったが、海外から一二名の招待講演者を含む一六名による充實した研究發表・講演が行われ、國内外から一〇〇名を超える參加を得て、終始白熱した議論が續き、好評裡に閉會した。

三教交渉の研究（Ⅱ）　班長　麥谷　邦夫

本研究班は、「三教交渉の研究」研究班の後を承け、引き續き中國中世における儒佛道三教間のかかはりをさまざまな角度から研究することを目的に、二〇〇五年度から五年間の豫定で組織された。昨年は、陳垣『道家金石略』所收の隋唐道教關係碑文のうち以下の七碑の解讀を行った。

奉仙觀老君像碑
八都壇神君實錄
潘尊師碣
升仙太子碑
崇高山啓母廟碑銘
木潤魏夫人祠銘

北朝石刻資料の研究　班長　井波　陵一

前年度に引き續き、人文科學研究所所藏の北朝石刻資料に關して、文字の對校、および訓讀・語注の作成をおこなった。本年取り上げた資料は、「元景造石窟記」「高慶碑」「石門銘」「嵩顯寺碑」「北魏石窟寺碑」である。

二〇世紀中國の社會システム　班長　森　時彦

清末から現在にいたる一〇〇年間における中國の社會システムの變動を多様な側面から總合的に檢討することを目的として二〇〇三年四月に發足した本研究班は、二〇〇八年三月をもって五年間の研究期間を終えることになっている。本年の發表は報告論文集に掲載豫定の論考についての豫備報告を中心におこなわれ、若手研究者の意欲的な報告が多くを占めた。

二月　二日　青島における新聞史の開始
高　瑩瑩
二月一六日　日中戰爭期における「國防映畫と邊境」
韓　燕麗
四月二七日　庶民のための書き言葉を求めて―清末から民國へ
蒲　豐彦
五月一八日　上海共同租界警察―文書とシステム
石川　禎浩
六月　一日　陶行知とデューイ
川尻　文彦
六月一五日　清末、廣東における地方自治政策と自治研究社
宮内　肇
六月二九日　領域化する鄉―四川農村の近代―
小島　泰雄
九月二八日　メコン河上流域における英佛對立と清朝
望月　直人
青島新聞業の開始―ドイツ時代における青島の近代新聞
高　瑩瑩
一〇月一九日　清末山東黄河治水策の終焉
細見　和弘
一一月一六日　近代的職業外交官の登場―外務部期の改革を中心に
箱田　惠子
一一月三〇日　韋君宜から見た中國革命史再構築の試み―作家、編集者、革命家の視點から
楠原　俊代
一二月一四日　明治期雜誌記事と魯迅の「スパルタの魂」
森岡　優紀

漢字情報學の構築　班長　安岡　孝一

昨年に引き續き、白文に對する自動「點」打ちプロジェクトの研究をおこなった。具體的な方法としては、返り點のついた漢文を「教師データ」とし、そこから形態素解析用のコーパスと辭書を生成することにした。この方法で、ある程度の白文は自動處理できる感觸を得たが、「教師データ」の量が現狀では不十分であり、さらに研究を進めるためには、さらに多くの「教師データ」を準備

する必要を痛感した。

中國古代の基礎史料　班長　淺原　達郎

引き續き、上海博物館藏楚簡を讀んだ。昔者君老・内禮（一月二六日）、容成氏（二月二日～二月二三日）と進み、容成氏はまだ讀了していない。

『日古』第八號（三月二三日）を刊行し、「讀上海博物館藏楚簡札記序」（淺原達郎）を掲載した。上海博物館藏楚簡の解讀の過程で、竹簡の見ために注意することの重要性に氣づいたので、そのことを論じている。二〇〇七年三月をもって三年の所定の期間を終了したが、ゴールのある研究班ではなく、そのままの姿勢で新しい研究班に移行する。

銀雀山漢墓竹書殘簡の整理―中國古代の基礎史料　班長　淺原　達郎

中國古代の基礎史料班をそのまま繼續し、基礎的な史料や論文を讀んでいくが、平行して「銀雀山漢墓竹書殘簡の整理」という課題を設定した。とりあえずは、すでに公表された銀雀山漢簡を吳九龍『銀雀山漢簡釋文』の番號と對照していくところから、作業を始めている。前班から引き續く基礎學習は、論文と古文字資料の二本だてとし、論文は裘錫圭「從馬王堆一號漢墓〝遣册〟談關于古隸的一些問題」（四月二〇日～一一月二日）から始めて、同じく「寒食與改火―介子推焚死傳說研究」（一一月一六日～一二月二一日）にとりかかったところである。資料は、引き續いて上海博物館藏楚簡・容成氏（四月二〇日～二七日）を片づけ、次に、班員の希望のあった鄂君啓節（五月一一日～六月八日）を讀み、また上海博物館藏楚簡にもどって、周易（六月一五日～一〇月一九日）、中弓（一〇月二六日～一一月三〇日）と讀み進み、恒先（一二月七日～二一日）にとりかかっている。

讀書記錄をまとめる作業はなお遲れていて、『日古』第九號（四月六日）に郭店楚簡の五行・魯穆公問子思・窮達以時、『日古』第一〇號（九月一四日）に郭店楚簡の唐虞之道・忠信之道および鄂君啓節の札記を公表した。

陰陽五行のサイエンス　班長　武田　時昌

陰陽五行說は、物類や自然現象の法則性や相互關係を說明する原理として大いに用いられた學說であり、中國の諸分野において獨自の理論構造を生み出すパラダイム的な役割を果たした。これまでの研究においては、陰陽五行說の成立過程や配當說、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三國時代以降の史的展開や理論構造の特質ついては、十分な檢討がなされているわけではないように思われる。そこで、自然學に限らず思想、宗教から文學、諸技藝に至る多彩な分野において、天人感應、物類相感等を含めた陰陽五行の說明原理が、實際にどのように活用されているのかを分析し、包括的、複眼的な見地からその構造と特色あるいは限界性を考究したいと考えている。

二〇〇七年は、引き續き『五行大義』卷二、『醫心方』卷二を會讀するとともに、『春秋繁露』郊祀諸篇の讀書會も行った。また、朱建平教授（中醫科學院中國醫史文獻研究所副所長、中華醫史雜誌編集委員長）、水口幹記助教授（浙江工商大學日本文化研究所）を招いて、特別講演會を開催した。詳しい內容は左記の通りである。

一月一三日　『五行大義』卷二、論德　石立　善
一月一六日　『醫心方』卷二　閻　淑珍
二月　四日　特別講演「近二〇年來中國的醫學文化史研究」　朱　建平
二月二〇日　『醫心方』卷二　閻　淑珍
四月二八日　『五行大義』卷二、論合　森村　謙一
五月一九日　『五行大義』卷二、論合　森村　謙一
六月　五日　『春秋繁露』祭義篇　武田　時昌
六月一二日　『春秋繁露』郊祭篇　木村　亮太
六月二四日　『五行大義』卷二、論合　森村　謙一
『五行大義』卷二、論扶抑　多田　伊織
七月　三日　『春秋繁露』四祭篇　木村　亮太
七月二一日　『五行大義』卷二、論扶抑　多田　伊織
特別講演：「天地瑞祥志について」　水口　幹記
七月二四日　『春秋繁露』四祭篇　木村　亮太

八月　四日　『醫心方』卷四　武田　時昌
八月　七日　『醫心方』卷二　閻　淑珍
一〇月一六日　研究發表『春秋繁露』郊祀諸篇の錯簡部分の再檢討　木村　亮太
研究發表　劉完素の人物と著作について　三鬼　丈知
一〇月二〇日　『五行大義』卷二、論扶抑　多田　伊織
『五行大義』卷二、論相剋　村田　浩
一一月　六日　劉完素『素問玄機原病式』　三鬼　丈知
一一月一七日　『五行大義』卷二、論相剋　村田　浩
一一月二七日　研究發表『黄帝内經』の陰陽五行說　熊野　弘子
一二月一五日　『五行大義』卷二、論刑　橋本　昭典

元代の法制　班長　岩井　茂樹

二〇〇四年度から發足したこの研究班は、元朝時代の行政文書・法制文書の會讀をつうじて、その時代の制度と社會について知見をひろめることを目的としている。參加者それぞれが、會讀の作業のなかから研究すべき課題を見いだし、この時代の制度と社會の特質を理解する足がかりを得ることを期待している。とくに、前後の時代との連續と斷絶という問題について洞察を深めたい。すでに『大元聖政國朝典章』二八～三三および『新集至治條例』所收の禮部にかかわる部分の會讀を終えた。當該部分について、校訂電子本文を閲覧・檢索するＷｅｂアプリケーションを公開するとともに、『東方學報』京都第八一册に「『元典章　禮部』校定と譯注（一）」として、卷二八の譯注を掲載した。本年度は、班員およびゲストによる研究報告のほか、新出の『至正條格』についての檢討をおこなった。二〇〇七年一月～一二月の報告題目と擔當者を掲げる。

一月一六日　室町日本の朝貢使節と貢使宋素卿　山﨑　岳
二月　六日　無商不國―清末、一人の候補官の北京旅行　伍　躍
二月二〇日　宋夏元符和議と遼宋事前交渉　毛利　英介
三月　六日　興中府三學寺と一一六〇年代金朝の寺觀政策　Jesse Sloane
三月二〇日　北宋末の蔡京一族　藤本　猛
四月一七日　清初の内外互用論と内陸外轉論　小野　達哉
五月一五日　江海の賊から蘇松の寇へ　山﨑　岳
六月　五日　徽州明代訴訟關係文書から見た事件處理過程　岩井　茂樹
七月　三日　李齊賢在元事跡考―峨眉山奉祀行　金　文京
七月一七日　『至正條格』臆議　植松　正
九月一八日　『至正條格』出現の意義と課題　植松　正
元刊本『至正條格』について　金　文京
一〇月一六日　『元典章』禮部校定本の檢討
一〇月三〇日　『元典章』禮部校定本の檢討
一一月二〇日　『元典章』禮部校定本の檢討

中國近世日用類書の研究（二〇〇四．四～二〇〇七．三）　班長　金　文京

本研究班は、これ以前の「元代の社會と文化」研究班を受け繼いで、中國近世の代表的な日用類書である『事林廣記』の會讀を行い、譯注作成を目的としたものである。ただし『事林廣記』は大部の書物であり、前の研究班から六年をかけて、ようやく全體の約三分の一を讀み終わったのを機に、ひとまず終了することとした。譯注の一部は『東方學報』に發表したが、全體の成果報告をどのような形で出すかについては、今後、檢討するつもりである。なお「元代の社會と文化」研究班については、昨年一〇月に、研究成果として『元刊雜劇の研究―三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀會』（共著　汲古書院）を刊行した。

唐代文學の研究（二〇〇七．四～二〇一〇．三）　班長　金　文京

本研究班は、正倉院所藏、光明皇后親筆として有名な唐代の書儀（手紙の文例集）『杜家立成雜書要略』の會讀、譯注作成を目的としている。本年度は、全體で三六ある往復書簡文例のうち、第八までを讀了、譯注原稿を作成した。また一〇月には、大谷大學文藝學會との共催により、南京大學教授、曹虹氏の講演會（題目「李清照與魏晉風

流」）を開催した。

眞諦三藏とその時代　班長　船山　徹

今年度は下記の內容について譯注を作成し、檢討を行った。（　）內は譯注擔當者。『續高僧傳』法泰傳、智愷傳（坂內榮夫）、同・曹毘傳、智敦傳、道尼傳（古勝隆一）、同・曇遷傳（麥谷邦夫）、眞諦撰『部執論疏』佚文（加納和雄、大竹晉）、眞諦撰『解深密經疏』佚文（齋藤智寛、藤井淳）、眞諦撰『金光明經疏』佚文（潘哲毅、三宅徹誠）、眞諦撰『攝大乘論義疏』佚文（那須良彥、室寺義仁）、眞諦撰『九識章』佚文（吉村誠）。また、『九識章』の意義と問題點について、全員による討論會を開いた。

中國古鏡の研究　班長　岡村　秀典

漢代の銅鏡は、圖像紋樣の變化がいちじるしく、考古資料の年代をはかる指標として東アジア各地で重視されてきた。また、その圖像と銘文は、漢人の精神世界をものがたる資料としても注意されてきた。そのような視角に留意しながら、昨年につづき音韻論から漢鏡の銘文を論じたB. Karlgren, "EARLY CHINESE MIRROR INSCRIPTIONS"（BMFEA, No. 6, 1934）を會讀した。平行して實施した研究發表は以下のとおり。

一月　九日　中國古鏡における陰陽五行的銘文表現（續）　光武　英樹
一月三〇日　魏晉鏡の佛像　向井　佑介
二月一三日　三角緣神獸鏡の研究史　下垣　仁志
二月二七日　魏晉南北朝代の裝身具　肇　文
四月一〇日　羅振玉「鏡話」と清朝の古鏡研究　岡村　秀典
四月二四日　銅鏡生產の變容と交流　森下　章司
五月二二日　南朝鏡の設定　岡村　秀典
六月一二日　山東臨淄發見の漢代鏡笵について　廣川　守
七月　三日　古鏡研究の思想　山　泰幸
一〇月一六日　羅振玉以後　岡村　秀典
一〇月三〇日　山東出土鏡笵の研究（二）　廣川　守
一一月二〇日　三角緣神獸鏡の銘文　下垣　仁志
一二月一一日　二一世紀COE國際シンポジウム「漢字文化三千年」

中國社會主義文化の研究　班長　石川　禎浩

冷戰體制の終結以後、いわゆる〝社會主義の文化〟は世界中で風化しつつあるが、今日の中國には、社會主義的な文化樣式やイデオロギーがなお根強く殘存している。現にそれらは、一般民衆の思考樣式になお影響を與え、現體制の文化政策を方向付け、そして中國共產黨史の歷史記述を強く規定している。また、二〇世紀中國における社會主義文化の展開は、同時代日本の社會主義文化の影響を受けたばかりでなく、戰後には日本の中國學に大きな影響を與えたことも忘れてはなるまい。二〇〇六年四月より三年計畫で發足した本研究班は、二〇世紀中國の社會主義文化の諸相を主に歷史的視點から研究することを目指している。二年目に入った今年は、四月の京都大學現代中國研究據點（人文研附屬現代中國研究センター）の發足に伴い、同據點の研究グループ一の事業という性格を合わせ持った活動を行った。本年の報告は以下の通りである。

一月二六日　孫文の科學觀形成―香港西醫書院とジェームス・カントリー　武上眞理子
二月　九日　知識人と〝邊疆〟問題―顧頡剛を中心に　島田　美和
四月二〇日　西北歷史爭論問題始末―〝敏感〟な歷史問題は如何に處理されてきたか　石川　禎浩
五月一一日　文革期の地下文學―〝手抄本〟作品の出版とその研究　瀨邊　啓子
五月二五日　陳獨秀の「最後の見解」をめぐって　江田　憲治
六月二二日　畫家・何香凝に關する一考察　竹內　理樺
七月　六日　沈從文について―作品「邊城」の題記に關する考察　佐原　陽子
七月一三日　中國現代思想史上的〝自由主義〟　章　清
七月二〇日　京都大學の中國近現代史研究　狹間　直樹
九月二一日　日中戰爭前期における中國共

産黨の黨軍關係に關する一考察　田中　仁

一〇月　五日　「倭寇」と資本主義萌芽論爭　山﨑　岳

一〇月一二日　清末における湖南教育總會の位置づけ―提學使吳慶坻の教育行政との關わりから　宮原　佳昭

一〇月二六日　冀魯豫區の中共基層組織と會黨　丸田　孝志

一一月　九日　社會主義文化としてのスポーツ　高嶋　航

一二月　七日　清末の〝自由主義〟川尻　文彦

複數文化接觸領域の人文學　班長　田中　雅一

今年は、本研究班の實質二年目に當たる。初年に引き續き參加者の個別發表と『カーブル』の會讀という二本立てを柱に活動した。具體的な報告内容については本研究班のホームページを參照して欲しい。この研究班は人文學國際研究センターの據點プロジェクトでもあることから、センター主催の國際シンポや講演會も重要な活動の一部をなす。また、研究會の成果の一部は『コンタクト・ゾーン』誌公刊という形で公表した。

一月一五日　ヴェーダの「發見」―古代と現代との接觸―　藤井　正人

二月一九日　接觸領域における暴力の記憶―臺灣先住民族タイヤルと日本人　中村　平

五月一四日　接觸領域におけるミメーシス―南インドの商業移動民ヴァギリの信仰變容をめぐって　岩谷　彩子

五月二一日　〝輸入〟された食品でローカル・アイデンティティを構築する―日本の小豆島で創り出されたオリーブの傳統　ティナ・ペネワ

六月　四日　接觸領域としてのプリント布―東アフリカ「カンガ」とインド染色職人集團　金谷　美和

一〇月　一日　接觸領域としての邪視信仰―現代カトリック．マルタにおける惡魔學の再編について　藤原久仁子

一〇月二二日　『カーブル』會讀　六（p.五二―p.六二）　田中　雅一

一一月　五日　インド・イスラームと「複數文化接觸」：スーフィズムを通して　二宮　文子

コメンテーター：東長靖

一一月一九日　『カーブル』會讀　七（p.六三―p.七三）　神本　秀爾

一二月　三日　日本考古學の文化領域論―土偶の型式論をめぐって　磯前　順一

移民の近代史―東アジアにおける人の移動―　班長　水野　直樹

一九世紀後半から二〇世紀前半の時期、東アジアにおいて様々な理由―世界資本主義システムへの包攝、日本帝國の膨張、各地域の社會的變動など―から、大規模な「人の移動」が生じた。しかし、この問題についての研究は、各國・地域別に論じられる傾向があり、總合的に考察されることは少なかった。主に日本、朝鮮、中國など各地域間の人の移動とその原因を檢討し、人の移動の歴史的意味を考察することを目的として、歴史學（日本史・朝鮮史・中國史など）、地理學、社會學、經濟學など諸分野の研究者の共同研究として運營している。

研究會記錄（二〇〇七年）

一月一三日　長期の一九世紀アジアを求めて―帝國・ネットワーク・自由貿易―　籠谷　直人

米軍政期における在朝中國人の移動に關する研究　李　正熙

二月一〇日　朝鮮人渡航管理と「渡航阻止制度」―一九二〇年代後半を中心に―　福井　讓

戰後日本社會と滿洲引揚者、中國歸國者　蘭　信三

三月一〇日　「文化政治」初期（一九一九～一九二四年）の政治空間と在朝日本人　李　昇燁

在滿朝鮮人の映畫受容―『滿鮮日報』の巡回上映をめぐって　金　麗實

五月一二日　在滿朝鮮人の就籍問題と創氏改名　水野　直樹
東北アジアにおける華人移動の變遷　上田　貴子
六月一六日　滿洲移民の戰後經驗と地域社會：岐阜縣の事例を中心に　猪股　佑介
（書評）山本有造編『「滿洲」記憶と歴史』（京都大學學術出版會）　安岡　健一
七月　八日　戰時期華北・華中の朝鮮人　宮本　正明
（書評）米山裕・河原典史編『日系人の經驗と國際移動』（人文書院）　竹澤　泰子・水野　直樹
九月一五日　在滿朝鮮人共產主義者の革命觀と民族觀―南滿における中國共產黨內部の民族問題を中心に―　金　永哲
韓國における戰時動員調査活動について―強制動員被害眞相糾明委員會の報告書を中心に―　李　昇燁
一〇月一三日　臺灣を經由して華南地方に渡航した朝鮮人「慰安婦」たち　藤永　壯
戰時期における朝鮮人渡航管理政策について　福井　讓
一一月一〇日　（フィールドワーク）「一九二〇年代朝鮮人・中國人勞働者が從事した建設工事」（京都市左京區　比叡山ケーブルカー・ロープウェイ）
一二月　八日　華僑史研究の動向と論點　籠谷　直人
植民地下新義州朝鮮華僑について：一九二〇年～一九三六年　宋　伍強

虛構と擬制―總合的フィクション研究の試み　班長　大浦　康介

三年目にあたる二〇〇七年は、サブカルチャー、天皇制、心理學／精神分析、人類學、歴史叙述等とフィクションとの關係を探った。また一一月には「西洋のフィクション・東洋のフィクション」というテーマで國際シンポジウムを開いた。研究發表は以下のとおり。

一月一五日　ゴシック・ロリータ―ファッションのなかの“Cool Japan!”　小野原敎子
二月　五日　近代日本と神武天皇の顯彰　高木　博志
二月一九日　プロレスの「虛實」をめぐる二、三の事柄　師　茂樹
三月　四日　擬制（フィクション）としての課徵金　石岡　克俊
三月一九日　鏡、分割、規範―ピエール・ルジャンドルにおけるフィクション　橋本　一徑
四月二三日　心理療法における表象と表象不可能性　大山　泰宏
五月二一日　フィクションとデモクラシー―理論と實踐　セバスチャン・ヴェグ
六月　四日　虛構の中の眞理―ディドロ『運命論者ジャックとその主人』をめぐって　王寺　賢太
六月一八日　Fiction から fixion へ―精神分析はフィクションについて何を語れるか　立木　康介
七月　九日　フィクションの生態學―ベイトソンの思考を手がかりに　田邊　明生
一〇月一五日　ケーテ・ハンブルガー『文學の論理』を讀む　久保　昭博
一一月　五日　國際シンポジウム「西洋のフィクション・東洋のフィクション」
フィクション能力からフィクションの諸藝術へ　ジャン＝マリー・シェフェール
歴史からフィクションへ―近代中國文學成立の諸問題　セバスチャン・ヴェグ
現代小說とフィクションの變容―プルーストの場合

ユアナ・ヴルトゥア

私小説とフィクション　大浦　康介

一一月一九日　「共同體の物語り」とフィクション　森　明子

一二月　三日　共和制「末期」というフィクションをかたる　鷲田　睦朗

一二月一七日　擬制としてのグルジア義賊　伊藤　順二

文明と言語　班長　横山　俊夫

當研究班は、文明化過程において言語という社會媒體がどのように變容するか、その諸相を前近代の文藝から現代科學にいたる多様な分野から檢討しようとの意圖で二〇〇二年度に發足。二〇〇七年三月に當初豫定した五年間の活動を終え、整理期間としての二〇〇七年度には、一六回の研究班會合のほか、報告書執筆に精進した。また、いわば副產物として次の報告書や提言が、班員の言語意識を背景に生まれた。（一）『難波鉦―松之部抄』（共同研究拾遺―續編二〇〇七．一二）、（二）『京都提言　二〇〇七／Kyoto Proposals二〇〇七』（共編、和英兩文　二〇〇七．一二）、（三）『第九回京都大學國際シンポジウム―人間の安全保障のための地球環境學／中間報告書』（共編、和英兩文　二〇〇七．一二）。また、次の催事の企畫も、當研究班の活動の一端を反映したものである。（一）「小さな寫眞展」法然院（二〇〇七．八―九）、（二）「ゲノムひろば」大阪ＯＭＭビル（二〇〇七．一〇）。

一月二〇日　『難波鉦』輪讀「手詰」　廣瀨千紗子

女節用集再考　横山　俊夫

二月　三日　『難波鉦』輪讀「印問答」　深澤　一幸

二月一七日　『難波鉦』「初冠」倉島譯稿補訂　全員

同　輪讀「大番」　後藤　靜夫

三月一〇日　『難波鉦』輪讀「納戸」　遠藤　彰

同「後連」武田譯稿補訂　全員

三月二四日　『難波鉦』輪讀「二字論」　岡田　曉生

同「二重腰」山極譯稿補訂　全員

四月二一日　島津記念館見學、報告書打合せ　全員

五月一二日　京大國史の「民俗學」時代―〈文化史學〉の魅力と無力　菊地　曉

五月一九日　劉炫の說得力　古勝　隆一

六月　二日　『難波鉦』輪讀「枕箱」　菊地　曉

六月三〇日　千里眼者あるいは表象の多様　田中祐理子

文明と文字の發展―及び東南亞細亞に於ける文明成立と文字に就いて　セルゲイ・ラプチェフ

九月二九日　『難波鉦』輪讀「埋火」　横山　俊夫

清末日本で覗かれた趙飛燕姉妹　深澤　一幸

一〇月二七日　『難波鉦』輪讀「品定」　古勝　隆一

幹細胞研究の新聞記事の分析　川上　雅弘

一一月一〇日　『難波鉦』輪讀「火廻」　齋藤　清明

〈貞節〉から〈夫婦愛〉へ―明治の淨瑠璃『壺坂靈驗記』の讀まれ方　ゲスト　細田　明宏

一一月一六日　寄生と共生―松枯れを通して考える　ゲスト　二井　一禎

一一月三〇日　東アジア漢字文化圏における文字と文學　金　文京

語りの表現と時間―太夫は何故演奏時間を氣にするか　後藤　靜夫

一二月一五日　口と手の關係―身體表現のベイシックス　ゲスト　野村　雅一

マンチェスターの太極拳　倉島　哲

一二月二二日　『難波鉦』輪讀「衣かづき」　深澤　一幸

同　「一時雨」　遠藤　彰

人種の表象と表現をめぐる學際的研究

班長　竹澤　泰子

本研究班の主たる研究成果は、二〇〇八年度、京都大學國際シンポジウム開催と本の出版という形で行う豫定である。本年は、その成果發表に向けて、全體の理論的枠組みづくりと執筆分擔者の個別の研究を進化させることに力を注いだ。本研究班の狙いが、表象を實態と照らして批判するという古典的表象研究にとどまるのではなく、人種の實在性をリアルに感じさせる、表象のエージェンシーとしての役割に注目することを再確認した。ジェンダーやセクシュアリティとの交錯にかんしては、形質人類學から映畫評論に至るまで關係するゲスト・スピーカーを一月から一二月までの間に何人か招き、研究班の射程を廣げる努力をした。九月には執筆豫定者が集まり合宿を行って、互いの第一草稿の合評會を行った。

一月一三日　再考：西洋美術における異邦人表現の傳統 ―〈東方三博士の禮拜〉圖像をめぐって―　高階繪里加

植民地から〈人種〉を再考する：アン・ストーラーによる試み　水谷　智、永淵　康之

一月一四日　アフロ系子孫のアイデンティティ創生は可能か？―チャベス再選後のベネズエラにおける民族運動―　石橋　純

保守『科學』と『人種差』『性差』論叢　瀬口　典子（ゲスト）

三月一〇日　日本映畫のイデオロギー分析―一九三〇年代の女性表象を中心として―　宜野座菜央見（ゲスト）

四月一三日　再び〈人種〉を問う：用語と人類學（者）　スチュアート　ヘンリ

〈混血〉研究の系譜學：日本における人類學・人類遺傳學と人種主義（經過報告）　坂野　徹

四月一四日　映畫〈人間みな兄弟〉をめぐる部落問題の表象　黑川みどり

今後の豫定と共同研究の問題提起　竹澤　泰子、出席者全員

五月一八日　〈哀れなカッフェイ〉とは何者か？：黑い肌のチャーティスト　小關　隆

各章の構成とキーワード『人種表象とリアリティ』　岩波執筆者全員

六月二九日　「ネルソンの死」と「イングランドの偉大さの秘密」の間―黑いヴィクトリア朝人再考―　井野瀬久美惠

アメリカスポーツ界における人種主義―ジョン・ホバマン著『アメリカのスポーツと人種』の出版とその反響を中心に　川島　浩平

七月二〇日　チャベス政權下ベネズエラにおける多文化主義と人種主義　石橋　純

ヒトゲノム研究と人類の多樣性―科學が社會と出會うとき　加藤　和人

「人種とゲノム」の今―アメリカ合衆國における最近の議論をめぐって　竹澤　泰子

七月二一日　「民族」の展示の現在、二〇〇七　吉田　憲司（ゲスト）

植民地朝鮮の醫學者・醫者と人種論　李　昇燁

九月二八～三〇日（合宿）

場所：ウェルサンピアさぬき

多文化主義が去った後に―アジア系アメリカ人アーティストたちの抵抗と自己表象　竹澤　泰子

映畫『橋のない川』にみる部落問題表象　黑川みどり

「哀れなカッフェイ」とは何者か？：黑い肌のチャーティスト　小關　隆

「黑人アスレティシズム」という幻想―日本人にとっての人

種觀・イメージと運動能力　川島　浩平
西洋美術における異邦人表現の傳統―〈東方三博士の禮拜〉圖像をめぐって　高階繪里加
虚ろな表情のドイツ人―ナチスの農民表象をめぐって　藤原　辰史
混血と適應能力―日本における人種研究の系譜學　坂野　徹
「顔が變る」：朝鮮植民地統治と朝鮮人の「見分け」　李　昇燁
もうひとつの「ネルソンの死」―黒人と女性はなぜ描き加えられたのか？　井野瀬久美惠
アフロ系子孫の民族創生とメディア戰略―チャベス政權下ベネズエラにおける人種主義と多文化共生　石橋　純
書評　貴堂嘉之譯　ロバート・リー著『オリエンタルズ』　石川　禎浩
虚ろな表情の「北方人」―「血と土の藝術」の農民表象をめぐって報告　藤原　辰史

一二月一五日　一九七〇代からの表象理論の趨勢について　齊藤　綾子（ゲスト）

啓蒙の運命―系譜學の試み　班長　富永　茂樹

二〇〇七年の『啓蒙の運命』共同研究班は一八回の研究會を開催し、二〇世紀における一八世紀ヨーロッパ思想史・文化史研究と諸々の「啓蒙」論をふりかえった初年度と、主に一九世紀ヨーロッパにおける「啓蒙」の受容のありさまを見なおした第二年度の共同研究の延長線上に、（一）一九世紀から二〇世紀にかけての世界における「啓蒙」の受容・變形・批判の諸相の檢討、（二）一八世紀ヨーロッパのいわゆる「啓蒙」の時代の再檢討の二つを主要な課題として進められた。この前者については、とりわけ日本を含むアジア、あるいはロシア、ユダヤ人共同體といったヨーロッパから見た周縁において「啓蒙」の名で呼ばれる現象の理解と、ヨーロッパにおける一八世紀から一九世紀の轉換點に現れた「啓蒙」とその後の連續性と斷絶性の理解とが焦點となった。この過程で、『百科全書』研究で知られるパリ第十大學のマリー・レカ＝ツィオミス教授や、ロシアとヨーロッパの文化的交渉史を專門とする、モスクワ世界史研究所のセルゲイ・カルプ教授らをゲストに招き、活發な議論を持つことができたのも實に喜ばしい經驗であった。

二〇〇七年の夏期休暇前まで、二〇世紀から一八世紀に遡るかたちで展開された「啓蒙」の系譜學的探究は、共同研究に參加する班員の共通了解の地平を作り出すためのものであったが、後期からは、共同研究の成果報告を念頭に、それぞれの班員が自らの個人研究を發表する段階に移行している。多様な關心を持つこれらの個人研究は、（一）一八世紀の思想を同時代の社會史・政治史とつきあわせながら新たな解釋を提示する試み、（二）「啓蒙」に近代の政治や社會の基本構想を生み出した起源を認め、それが一九世紀以降どのように批判されつつ受容されていったかを明らかにする試み、（三）近代の諸學（醫學・法學・社會學など）や、それらの諸學への批判をはらむ知的な革新（精神分析など）が、「啓蒙」ととりもつ關係を明らかにする試みの三つに大別することができる。これらの個別研究の交錯からは、互いの視點を補いつつ、全體としてヨーロッパの一八世紀との關係において二〇世紀にいたる世界史を讀みなおす、新たな思想史的な展望が開けることが期待されよう。

「啓蒙の運命―系譜學の試み」二〇〇七年の研究會記錄

一月一九日　十八世紀前半ドイツ文學（現象）における「快樂の活用」の言説　田邊　玲子
二月　二日　ヘーゲルと啓蒙：〈知〉のリミットをめぐって　佐藤　淳二
二月一六日　啓蒙の時代と證券投資　坂本優一郎
三月　二日　『百科全書』と同時代の辭典　マリー・レカ＝ツィオミス（ゲスト）
三月一六日　ゼーヴ・シュテルンヘルによ

四月二〇日　る反啓蒙の系譜學　上田　和彦
東アジア世界の科學啓蒙　武田　時昌
五月一一日　ロシアの啓蒙君主制と啓蒙の哲學者たち―二〇世紀後半におけるいくつかの歴史叙述パラドクス―　セルゲイ・カルプ（コメント：橋本伸也）
六月一五日　啓蒙と革命―「哲學者たち」の運命　桑瀬章二郎
六月二三日　『合理的な選擇』假説と啓蒙の知性觀をめぐって　長尾　伸一
七月　六日　ユダヤ的記憶の解體と再構成　向井　直己
七月二一日　非歐世界における啓蒙の位相―主題・方法・擔い手をめぐって―　山室　信一
九月二一日　トクヴィルと啓蒙　富永　茂樹
一〇月　五日　ルイ・パストゥールと〝啓蒙の運命〟　田中祐理子
一〇月一二日　革命前グルジア農村における啓蒙活動：週刊『轍』紙上にみる　伊藤　順二
一一月　二日　文人の世紀―北學派から蒹葭堂へ―　高橋　博巳
一一月一六日　ラカンの「カントとサド」をめぐる三つの思想史　立木　康介
一一月三〇日　コンドルセからコントへ：啓蒙の轉換　北垣　徹
一二月　七日　パートナー交換から「法的に倫理的な愛」へ―モーツァルト・オペラにおける戀愛啓蒙の運命？　岡田　曉生

近代古都研究班　班長　高木　博志

「古都」とは、天皇がいなくなった「舊都」（もとのみやこ）である。一八六九年の東京「奠都」（てんと）による天皇の畿内よりの離脱は、古代から近世をつらぬく王權の基盤を編成替えする日本史上の事件であり、奈良・京都という古都形成の起點となる。

さて「近代古都研究」班は、「近代京都研究」班（二〇〇三―二〇〇五年度、丸山宏班長）を發展させ、歴史學・建築學・造園學・美術史などの諸分野の研究者による總合的な研究をおこなっている。「歴史と都市」をひとつの手がかりとして、京都のみならず、奈良・首里・伊勢や地方城下町といった「近代古都」を研究對象にしている。

「古都」は近代に生みだされたものであり、その言葉は古都保存法（一九六六年）以降の戰後社會に定着する。二〇〇三年に大津が古都保存法で指定（一〇番目）され、金澤等の城下町も對象として考えられつつある。また冠せられた「古都」というイメージと都市行政のめざすものは、必ずしも一致したわけでない。「近代京都研究」班で明らかになったように、つねに工業・産業振興を行政の基盤におく京都府や市の姿勢があったことなど、その理念と實態には歴史的にズレがあった。したがって研究會では大わくで、「古都」（園田英弘氏のいう「みやこ」の王宮性・首都性・都會性）とみなされている場を對象とし、近世から現代までのスパンで、學際的に自由な議論を重ねてきた。

近世史についても、「古都」の多様性を考える上でも、そのあり方の解明は不可缺である。研究會を重ねるなかで、日本における「古都」論を考えてゆけたらと思う。また將來的には慶州や西安などのアジアの古都やヨーロッパの古都についても研究の射程にいれてゆきたい。

今年度は、とくに近代の學知である文獻研究とフィールド調査（巡見）を連關させるべく、洛中御靈社巡り、金澤、元興寺・奈良公園、京都御苑などの實地で研究會を行った。

班員　岩城卓二、金文京、高階繪里加、谷川穰、水野直樹（以上、所内）、秋元せき、飯塚一幸、井上章一、井原緣、伊從勉、内田和伸、大場修、岡村敬二、長志珠繪、小野健吉、小野芳朗、河西秀哉、桐浴邦夫、工藤泰子、黒岩康博、小林丈廣、清水愛子、清水重敦、鈴木榮樹、Henry Smith、高久嶺之介、田島達也、田中智子、谷山正道、中川理、中嶋節子、並木誠士、奈良勝司、羽賀祥二、幡鎌一弘、原田敬一、日向進、廣瀬千紗子、福井純子、福島榮壽、藤原學、丸山宏、毛利紫乃、本康宏史、山上豊、山田誠、山田由希代、吉井敏幸、吉田榮治郎

一月一三日　〈京都：今と昔〉―京都の近代を留學生に教える一提言―

ヘンリー・スミス「趣味」から「土俗學」へ ― 雜誌『鄉土趣味』の展開 ―　黑岩　康博

三月一七日　近代奈良の地域形成と名望家の動向 ― 古都の整備に關連して ―　山上　豐

壬申寶物調査と法隆寺の寶物獻納　吉井　敏幸

四月二一日　定住と漂泊の能役者 ― 都市の境界と「庭」　小野　芳朗

大阪天神祭の變容と都市空閒 ― 都市祭禮の近代 ―　中嶋　節子

五月一九日　書評會：高木博志『近代天皇制と古都』　小林　丈廣、井上　章一

六月一六日　最後の朝廷 ― 幕末の京都と慶喜政權 ―　奈良　勝司

藏書、その時代の過ごし方 ― 「滿洲」に遺された書物を中心に　岡村　敬二

六月三〇日　談話會：女性からみた町家住まいと祇園祭　小島富佐江、杉本　節子、秦　めぐみ、池上　英子、伊從　勉

七月二一日　フィールドワーク　洛中御靈社巡り（今宮神社、白峰宮、晴明社、幸神社、上御靈社など）　案内者　廣瀨千紗子

一〇月一三～一四日　フィールドワーク　金澤（石川縣立歷博、護國神社、舊偕行社など）　案内者　本康　宏史

書評會：橋本哲哉編『近代日本の地方都市』　高木　博志、原田　敬一、小林　丈廣、田中　智子、谷川　穰

一一月一七日　フィールドワーク　奈良（元興寺、大乘院跡、奈良博、舊縣廳など）　案内者　吉井　敏幸

西南雄藩と大和 ― 生駒市域の古文書調査をもとに ―　谷山　正道

一二月一五日　フィールドワーク　京都御苑（閑院宮邸跡、舊九條家拾翠亭など）　案内者　小澤　晴司

近代京都における都市計畫事業の計畫主體をめぐって　中川　理

歷史遺產空閒と地域社會 ― 栗林公園と城下町都市高松　井原　緣

空閒の再審 ― 人文・社會科學の新基軸を求めて ―（二〇〇四・四～二〇〇七・三）　班長　山室　信一

空閒とは、時閒とともに人閒が自己と他者について認知していくための不可缺な枠組みであり、人閒とその社會のありかたを追求すべき人文・社會科學においては、明確な概念規定に基づく體系化が要請されている。しかしながら、歐米近代の人文・社會諸科學においては、時閒こそが基軸となっており、空閒そのものを對象として捉えることに必ずしも成果を擧げてきたわけではない。しかも、グローバリゼーションの進行の中で空閒の把握は時閒や速度によって置き換えられつつある。しかし、グローバル化によって生活樣式の平準化が進めば進むほど、機構や生態などの地理的條件、都市や建築などの空閒形式の差異のありかたこそが、人閒觀・社會觀そして世界認識のありかたをますます規定していく可能性もまた否定できない。

この共同研究では、自然環境と人閒活動の關係や、生活空閒としての都市・建築などの形成のされかた、そしてさらにそれが世界認識としていかに把握されてきたか、といった學知と實踐知そのものを再審に付し、そこから新たな人文・社會科學の基軸を析出していくことをめざした。本年は、建築・海域世界・生態などの各種空閒および空閒の學知形成史についてフィールドワークを通じて、本研究班の活動を總括した。

班員　菊地曉　坂本優一郎　藤原辰史　谷川穰（以上所內）　早瀨晉三（大阪市大）　中島嶽志（北海道大）

二月　五日　報告「『空閒の再審』を再審する」およびフィールドワーク

菊地

二月一八日～二月一九日　空間に關する學知形成史のフィールドワーク　山室、早瀨、谷川、坂本

三月一一日～三月一三日　海域世界および、科學技術と空間の關係についてのフィールドワーク　山室、谷川、坂本

第一次世界大戰の總合的研究に向けて（二〇〇七．四～二〇〇九．三）

班長　山室　信一・岡田　曉生

第一次世界大戰のインパクトの內實を、戰後世界を視野にいれつつ模索することが本研究班の目標である。一年目となる二〇〇七年度は、藝術、政治、經濟、社會、思想のさまざまな分野において第一次世界大戰がどのような位置を占めるのか、問題を提起してもらい、その共通點と相違點を探った。また、Hew Strachen (ed.), The Oxford Illustrated History of the First World War の輪讀を通じて、研究會の議論の基盤を構築するよう努めた。二〇〇七年度の發表內容は以下の通りである。

★一　二〇〇七年の研究會記錄

四月二八日　第一次世界大戰研究のスコープ：世界性と總體性の二重性をめぐって　山室　信一

五月二八日　音樂史における第一次大戰の「前」と「後」　岡田　曉生

六月　九日　ヨーロッパ統合の遠い端緒：第一次大戰、米國、J・モネ　遠藤　乾

六月二五日　塹壕の虛妄―アイルランドから第一次大戰を見る　小關　隆

七月一五日　タイトル：一九一四年と一八七七年を分かつもの―第一次大戰は最終次露土戰爭か？　伊藤　順二

七月二三日　言語不信の文學―フランス戰爭小說における口語文體　久保　昭博

九月二四日　認識と決斷―文化をめぐる知と政治　第一次大戰前後のドイツを中心に　王寺　賢太

一〇月一三日　古典主義運動と不定形なもの―第一次世界大戰期前後のフランス文學　森本　淳生

一〇月二九日　ヨーロッパにおける第一次世界大戰關連モニュメント、資料紹介　山室　信一、坂本優一郎、藤原　辰史

一一月一八日　比米日三角關係史のなかの第一次世界大戰：日米戰爭へと至る道　早瀨　晉三

一一月二五日　食糧戰爭：「カブラの冬」の教訓　藤原　辰史

一二月一〇日　戰爭神經症は精神分析に何をもたらしたか　立木　康介

★二　人文研アカデミー

◎「第一次世界大戰と藝術」

五月一七日　トラウマ―第一次世界大戰を體驗した作曲家たち　岡田　曉生

五月二四日　危機と再生―秩序の回復へ―　高階　秀爾

五月三一日　イタリア無聲映畫の榮光と沒落―ジョヴァンニ・パストローネ『カビリア』（一九一四）を巡って　石田　美紀

六月　七日　ダダと戰爭―チューリッヒからパリ　塚原　史

◎レクチャーコンサート

一一月二七日　一九一二／一九三九：二つの『世界大戰前夜』／二つのピアノソナタ　岡田　曉生、小坂　圭太

班長　藤井　正人

王權と儀禮

本共同研究（二〇〇五年四月―二〇〇九年三月）は、王權と儀禮との關係を古代インドの王權儀禮を中心に研究することを目的としている。ヴェーダ文獻を基礎資料にしているが、インド學の諸分野のほか、歷史學、考古學、美術史、人類學などの複數の視點から資料を分析するとともに、さまざまな時代と地域における王權と儀禮に關わる問題を比較研究の對象としている。

隔週に開いている研究會では、會讀と報告をほぼ交互に行なっている。會讀では、ヴェーダ祭式

文獻の中から王卽位式（ラージャスーヤ）に關するすべての箇所を讀解し、この儀禮に關する全資料の譯注と研究をめざし、現在、約四分の三の檢討を終えている。報告については、今年度はこれまでにインド中世史、考古學、言語學、ヴェーダ祭式學からの報告を受けた。來年度は、會讀では殘り部分の讀解を終えた後、出版に向けて作成資料の編纂を行なう豫定である。報告では、論文集の原稿作成に向けて個々の研究に檢討を加えるとともに、會讀の成果をさまざまな角度から分析することを豫定している。

一月一九日　第二三回研究會（報告會一〇）
The Pahlavi Bundahishn and the relationship between Iran and the East.
Daryoosh Akbarzadeh

二月　二日　第二四回研究會（會讀一三）
Vadhula-Srautasutra　一〇、六、四三-七、二〇
大島　智靖

二月一六日　第二五回研究會（報告會一一）
Vidarbha, Daksina Kosala, North Bengal—近年の遺跡發掘狀況を中心として—
横地　優子

六月　一日　第二六回研究會（報告會一二）
Purusamedha, Vastupurusa, Manasarapurusa: Theory and material evidence for the Vedic Agnicayana Altar, human sacrifice, construction sacrifice, and the 'Man of the Homestead' (Vastupurusa) in ancient India.
Hans Bakker

六月一五日　第二七回研究會（總括）
これまでの會讀のまとめと、これからの研究の進め方
藤井　正人

六月二九日　第二八回研究會（報告會一三）
南アジアにおける二つの文明社會：インダス文明とガンガー文明
上杉　彰紀

一一月　二日　第二九回研究會（報告會一四）
ベンガルの詩的言語—吟遊詩人バウルと古ベンガル語の佛教贊歌集チャルヤーパダ
北田　信

一一月一六日　第三〇回研究會（會讀一四）
Vadhula-Srautasutra　一〇、七、二一-四二
横地　優子

一二月二一日　第三一回研究會（報告會一五）
ヴェーダ祭式體系における王權儀禮の發展：Rajasuya—Asvamedha—Purusamedha—Sarvamedha
手嶋　英貴

人文研探檢

班長　岩城　卓二・菊地　曉

本研究班は、まもなく八〇周年を迎える人文研の歷史を、基礎的データに基づいて檢證し、日本の人文・社會科學のあり方を再檢討する試みである。本研究班の對象は、人文研の活動により產み出されたさまざまなプロダクトであるが、大別して、（一）人文研の研究者により執筆された著作、（二）人文研が擁した人的資源、（三）人文研の活動により集積された資料群、（四）いわゆる「共同研究」スタイルから「カード・システム」といったさまざまなレベルの方法的蓄積、がある。これらを相互に連關させつつ、時代狀況との相關において把握することが本研究班の課題となる。本年は初年度であり、基礎的データのリストアップ作業を主眼とした。地下文書室の文書整理や關連研究機關の所藏資料調査、人文研のプロジェクトに携わった研究者からの聞き取り調査、などである。

四月　九日　文書整理
四月一二日　相談會
四月一六日　文書整理
四月二七日　分館見學會
五月一七日　文書整理
五月一八日　本館見學會
六月二九日　大阪市大新村文庫見學會
七月二五日　文書整理
八月　三日　文書整理＆相談會
一〇月　二日　奈良本辰也文庫見學會
一〇月一九日　相談會
一一月　九日　文書整理
一二月　七日　雲岡石窟の調査と東方文化研

究所　　向井　佑介

一二月一五日　口と手の關係―身體表現のベイシックス―

野村　雅一（ゲスト）

（横山班と共催）

アジア・ネットワークの研究（二〇〇四・四～二〇〇七・三）　班長　籠谷　直人

儒教の基本は、祖先崇拜（孝）だから、本籍に住むことが優先される。それゆえ「僑寓」は本籍の對峙概念であり、いずれは歸鄉することを前提にした。それゆえ、「僑」をある集團として使うことはなかった。他方、「華」は文明の中心を示したから、中心から移動した人や對象には使わなかった。華人という表現は、いずれは歸國する人物を含意したのであり、もしそうした意味の拘束をさけるのであれば、「唐人」という表現をつかった。つまり、中心からはなれた海外移住者には、中國の政治文化の原則からややはずれた「私人」を含意させたほうがよかった。

しかし、こうした私人の活動に政治的な枠をはめたのが、近代ヨーロッパの東漸を契機とする條約概念の浸透であった。中心から離れていても「中心を意識する集團」としての「華僑」像が創造された。一八四二年の南京條約は、主權、人民、領土を規定し、國家概念を東アジアに持ち込んだ。一八四四年にイギリスは、海峽植民地に生まれた人を「イギリス臣民」として保護をあたえることを宣言した。清朝としてもその對抗策としては、海外の中國人を「清國臣民」であると主張する必要があった。つまり一九世紀になって清朝帝國は、「華僑」、つまり「中心からはなれた集團」の存在を追認したのである。

華僑という表現の成立には送り出し先の鄉里（中華帝國）と移住先（ヨーロッパの植民地）との政治的な利害交渉の錯綜から生まれた。近年に華僑と華人をわける表現も移住先で中國籍を有する前者と移住先の國籍を取得した後者を區別する中國本國の意思を反映したものであった。そうであるとすれば、アジアの各地域に分布する華僑華人を研究對象にすることは、ヨーロッパ帝國主義の東漸から引きおこされた近代の再編を描くことになり、送り出し側の中國の帝國社會のあり方、そして、受け入れ先の地域であるアジアの植民地、主權國家の個性を議論することにつながろう。歴史學における西洋中心史觀や一國史觀からも捉えがたい華僑華人ネットワークを、「制度」として議論したい。D. ノースによれば、制度とは「人間がお互いにかかわりあうときの不安定さを輕減するために考案された構造」であり、それは法律のような公式的な規制や、「規範や慣習」のような非公式的な制約から構成されるルールの束であった。

ヨーロッパでは、權力が私的所有權にたいする恣意的な統制や、財産の沒收という「横暴」にでることを抑制した。公權力を相對化し、安全を確保しうる市場インフラが形成されてこそ、ヨーロッパの工業化が可能であった。M. ウェーバーによれば、「産業資本主義は、法秩序の恒常性・確實性・沒主觀性・法發見（司法）や行政の合理的な・原理的に計算可能」性が高くなる必要がある。他方で、中國では、市場を完全に近づけようとする、議會や、裁判所、取引所、そしてイデオロギーなどのインフラが、權力と商人との間でつくられなかった。代議制などによって公權力を相對化して、投資の安全を確保する「計算可能性」が高まらなかったゆえ、中國の工業化は遅れたと指摘されてきた。

しかし、近年の中國の明清史研究の文脈は、公權力の「横暴」を強調していない。むしろ清朝は、人の移動に制度的な規制を加えない開放性と流動性を備えていた。帝國にとっては沿岸交易によって臺頭した經濟主體が、王權への反抗勢力になることを未然にふせぐことに關心があり、そうでないかぎり移動や交易に介入する意思はなかった。そうした開放性を背景に、商人は權力の後援をうけなくても、地緣・血緣・業緣を通して取引コストを引き下げる工夫をこころみた。主權國家や私的所有權のような制度がなくとも、農業の商業化とプロト工業化による市場展開がみられた。商人のギルドやネットワークのような中間組織、そして村落共同體、家族などの制度が、取引コストを切り下げて、市場の擴張に貢獻した。

清朝の中國では、地租の金納化、商品作物の增加によって人口が增加した。資源に對して人口がふえると、中國では二つの對應があった。第一は、餘剰勞働を吸收する勞働集約型經營であり、第二の對應は、移動を通して、家族勞働を地域外

で吸収することであった。土地などの資源の足りない郷里で競争を繰り返せば、人々は共倒れとなるから、人々は移動という戦略で競争社會に對應した。郷里の競争を念頭にして、華僑が外地に赴くときに、生存の戦略としては、勤勉、節約、順應が徳目となり、移住先での社會的上昇の成功率を高くする可能性がある。

生存の戦略として、移動が選ばれれば、家族の構成員と協働するよりも、個人の才能を活かすことが優先された。それゆえ、教育への投資も重視された。近隣や宗族が奨學金や旅費を與えることもよくみられたように、移動には教育水準の向上による人材育成が求められた。そして、教育投資が、各人の才能を引き出すのであれば、決して單純な労働に就くのではなく、科擧の試験に合格することや、才能を生かした出稼ぎがすすむ。たとえば、科擧の試験に合格して、官界や學者になって上昇すれば、郷里の榮譽になる。そして才能を生かして、商人や海員として海外に赴き、成功して、送金すれば、郷里に錦を飾ることになろう。商人や海員のネットワークは、商品、熟練、使用人の補充を郷里から調達したから、さらに地縁・血縁・業縁のネットワークを伸張させた。日本のように「イエ」の維持は優先されず、むしろ、血縁、地縁、同郷、同方言の集團から良質な労働力を引き出すことが重要であった。

華僑が、「族譜」をつくるようになるのも、その外地で移住者が増加し、家族が増えて、先祖の廟の香爐や位牌をもって祭りを定期的に開催したことを含意した。そこでは確かな血縁のつながりでなくても、信用できる人材を兄弟と擬制して、その系譜に含みこむことも可能である。日本のイエでは、貯蓄を利殖にむけて、息子たちに労働を課して富を増やそうとするが、中國では貯蓄を利用して、兄を農民に仕立てたあとには、殘った子供たちを、それぞれの能力に應じて仕事を習得させる。この對照は、人は「生産力の理論」に従うのか、それとも「價値の理論」に従うのかを問うている。

三月　五日　國際シンポジウム「アジア・ネットワークの研究」中央研究院臺灣史研究所

籠谷　直人、大石　高志、上田　貴子、陳　來幸、城山　智子（ゲスト）

個人研究

人文學研究部

前近代日本の文明史的研究　横山　俊夫
近代東アジアにおける日本の法と政治　山室　信一
フランス革命と近代的主體の成立　富永　茂樹
近代朝鮮の政治と社會　水野　直樹
在日米軍を中心とする軍事共同體の人類學的研究　田中　雅一
文學理論の研究　大浦　康介
ヴェーダ文獻の生成と傳承の研究　藤井　正人
人種・エスニシティ論　竹澤　泰子
戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク　籠谷　直人
近代天皇制の文化史的研究　高木　博志
近代日本の藝術と西洋　高階繪里加
現代社會における生物學・生命科學　加藤　和人
音樂におけるロマン派とメロドラマ的音樂　岡田　曉生
一九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム　小關　隆
南アジアの歴史人類學　田邊　明生
近世ヨーロッパの歴史叙述と政治思想　王寺　賢太
幕末期の畿内・近國社會　岩城　卓二
精神分析的知を思想史的に位置づける試み

ザガフカスの「義賊」と戰爭　立木　康介
近代日本民俗誌システムの研究　伊藤　順二
近世ヨーロッパの國際金融研究　菊地　曉
近代西洋醫學發展史研究および身體論　坂本優一郎
ナチス・ドイツの農業政策　田中祐理子
近代日本における教育／教化／宗教の關係史　藤原　辰史
近代朝鮮在住日本人社會の研究　谷川　穣
身體技法の認識論　李　昇燁
近代詩の虚構性　倉島　哲
再構築されるオリシャ崇拜―異なる「人種・宗教」をとりこむアフリカ系アメリカ人の社會運動―　久保　昭博
東方學研究部　小池　郁子
中國の小說、演劇及び說唱文學の歷史　金　文京
中國美術の樣式と意味　曾布川　寛
中國建築の樣式・技法・空間　田中　淡
近代中國の綿紡織業　森　時彦
道教思想研究　麥谷　邦夫
敦煌寫本の言語史的研究　高田　時雄
中國古代中世の法制　冨谷　至
清代の文化と社會　井波　陵一
中國科學の思想史的考察　武田　時昌
近代中國の財政と社會　岩井　茂樹
先秦時代の金文　淺原　達郎
古代中國の考古學研究　岡村　秀典
川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究　池田　巧
インド・中國における佛教の學術と實踐　船山　徹
文字コード理論　安岡　孝一
イスラーム東漸史の研究　稲葉　穣
佛教研究知識ベース―禪佛教を例として　ウィッテルン、クリスティアン
中國共產黨史の研究　石川　禎浩
秦漢時代の制度史　宮宅　潔
高麗官僚制度研究　矢木　毅
中國注釋學史研究　古勝　隆一
中國近世の國家支配の研究　古松　崇志
文字定義情報に基づく文書表現系に關する研究　守岡　知彦
客家語およびその周邊言語の記述研究　中西　裕樹
中國古代中世の官制史　藤井　律之
モンゴル時代の文化政策と出版活動　宮　紀子
明代後期北慮南倭時代の中國社會　山﨑　岳
中國家具とその使用に關する研究　高井たかね
中國唐宋の文學批評　永田　知之
中國唐末宋初禪思想研究　齋藤　智寛
中國中世の考古學研究　向井　佑介

事業概況

第三回　TOKYO　漢籍　SEMINAR

二〇〇七年三月一〇日
於　學術總合センター（千代田區一ツ橋）

陽關以西―漢籍資料から見た西方社會　高田　時雄
「大唐西域記の成立」　岩尾　一史
「唐蕃會盟碑への道」　稲葉　穣
「漢籍資料から見た唐代アフガニスタン」

ヨーガ入門（人文研アカデミー）

二〇〇七年四月、五月　於　本館大會議室
四月一〇日、一七日、二四日、五月八日、一五日、二二日、二九日　田邊　明生

特別講演（人文研アカデミー）

二〇〇七年四月二四日　於　本館大會議室
ヨーガとは何か―その目的と方法　ディヴァダーム・ヨーガアーシュラム院長　スワーミー・アーナンダ

共同研究セミナー（人文研アカデミー）

二〇〇七年五月、六月　於　本館大會議室
第一次世界大戰と藝術
五月一七日　「トラウマ―第一次世界大戰を體驗した作曲家たち」　岡田　曉生
五月二四日　「危機と再生―秩序の回復へ」　大原美術館館長・京都造形藝術大學大學院長

五月三一日　「イタリア無聲映畫の榮光と沒落―ジョヴァンニ・パストローネ『カビリア』(1914)を巡って」　高階　秀爾
新潟大學人文學部准教授

六月　七日　「ダダと戰爭―チューリッヒからパリへ」　石田　美紀
早稲田大學法學部教授

傳統中國の庭園と生活空間　塚原　史

六月　九日

「中國庭園史の動向と展望」　田中　淡
中國社會科學院考古研究所研究員

「中國園林傳統與日本」　楊　鴻
京都女子大學教授　川本　重雄

「Seeing Horyuji through China」　法隆寺　ペンシルベニア大學教授
Nancy Shatzman Steinhardt
東京大學准教授　藤井　恵介

「Settings of Daily Life in Tang Chang'an 唐長安」　シンガポール國立大學教授　王　才強
中央大學教授　妹尾　達彦

「Buildings in Yuan ye『園冶』」　ニューサウスウェールズ大學上級講師
Stanislaus Fung

「The transition in garden style in late-Ming China　計成と張南垣、および董其昌を中心に」　リーズ大學講師　Alison Hardie
井波　陵一

「インド佛教の庭園デザインと古代中國の庭園」　外村　中
國際日本文化研究センター教授　白幡洋三郎

「元大都の皇城における庭園」　福田　美穂
滋賀縣立大學教授　布野　修司

「Jesuits Descriptions of Chinese Gardens」　ウィーン農工大學助教　Bianca Maria Rinaldi
東京大學教授　鈴木　博之

「The Song　宋　Tragedy of a Gardening Passion-The Short Life of the Genyue 艮岳　Marchmount」　ヴュルツブルグ大學教授　Dieter Kuhn
大東文化大學教授　三浦　國雄

六月一〇日

「商甲骨ト辭中的建築稱名和建築禮制」　中國社會科學院歷史研究所研究員
宋　鎮豪
岡村　秀典

「臺灣板橋林家花園的眞假與虛實」　中央研究院臺灣史研究所副研究員　黃　蘭翔
人間・環境學研究科教授　伊從　勉

「Infinite Worlds-Chinese Classical Garden as Scholarly Icon」　オレゴン大學准教授　Ina Asim
元武藏野美術大學學長　長尾　重武

「『西遊補』の庭園・建築群」　大阪府立大學教授　大平　桂一
情報科學藝術大學院大學學長　横山　正

「Gangshan 崗山：The mountain where the Buddha preached」　ハイデルベルグ大學教授　Lothar Ledderose
奈良國立博物館企畫室長　稲本　泰生

「Rocks in the Garden and Studio」　メトロポリタン美術館アジア部主任
James C. Y. Watt
曾布川　寛

夏期公開講座（人文研アカデミー）

二〇〇七年七月一四日　於　本館大會議室

名作再讀―いま讀んだらこんなに面白い（2）
ジャックの膝、ドニーズの太もも―ディドロ『運命論者ジャックとその主人』における性と語り　王寺　賢太
事件は帝國からふってくる―シャーロック・ホームズの推理　甲南大學文學部教授　井野瀬久美惠
「惡者」は戀人たちの最後の救世主―モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》とエロスの沒落　岡田　曉生

ジュニアアカデミー（人文研アカデミー／京都大學總合博物館）

二〇〇七年七月二八日　於　京都大學總合博物館

人文學ことはじめ―古文學を學ぶ

世界の文字　藤井　正人
青銅器の銘文　淺原　達郎
くずし字　岩城　卓二

連續セミナー（人文研アカデミー）

二〇〇七年一〇月　於　本館大會議室

東西文化交流の主役―ソグド人の美術と言語

一〇月　四日　「中國出土ソグド畫像の圖像學」　曾布川　寛

一〇月一一日　「ソグド人とソグド語・ソグド語文獻について」　文學研究科　吉田　豐

一〇月一八日　「壁畫に見られるソグド人の生活」　關西大學非常勤講師　景山　悅子

一〇月二五日　「ソグドと唐代の金銀器」　北京大學考古文博院教授　齊　東方

アスニー・ゴールデンエイジ・アカデミー（人文研アカデミー／京都市生涯學習總合センター）

二〇〇七年一〇月　於　京都アスニー

養生の東西

一〇月　五日　「仙女の語る長生術―古代中國の知恵に學ぶ―」　武田　時昌

一〇月一二日　「老いて樂しみを增す―貝原益軒『樂訓』から―」　横山　俊夫

一〇月一九日　「身體に合わせ　身體を變える―ヨーガとアーユルヴェーダのインド」　田邊　明生

一〇月二六日　「健康情報を視る養生のものさし―情報洪水に振り回されないために―」　エッセイスト・醫學ジャーナリスト　里深太典紀

二〇〇七年秋特別講座（人文研アカデミー／NHK京都文化センター）

二〇〇七年一〇月、一一月、一二月　於　NHK京都文化センター（ルネサンスビル6階）

教科書で學べない京都

一〇月二〇日　「近代に創られた古都奈良・京都」　高木　博志

一一月一七日　「近代京都と日朝關係の歴史」　水野　直樹

一二月一五日　「將軍の城・二條城と京の武士たち」　岩城　卓二

國際シンポジウム（人文研アカデミー）

二〇〇七年一一月五日　於　本館大會議室

西洋のフィクション・東洋のフィクション

フィクション能力からフィクションの諸藝術へ　フランス社會科學高等研究院教授　ジャン＝マリー・シェフェール

現代小說とフィクションの變容―プルーストの場合　フランス社會科學高等研究院研究員　ユアナ・ヴルトゥア

歴史からフィクションへ―近代中國文學發生の諸問題　フランス現代中國研究センター研究員　セバスチャン・ヴェグ

私小說とフィクション　大浦康介

開所七八周年記念公開講演會

二〇〇七年一一月一五日　於　本館大會議室

少數者を生きる―廣東ショオ族の言語文化―　中西　裕樹

「創氏改名」における同化と差異化　水野　直樹

ハリとハラとハラノムシ―鍼灸師の古醫書研究　長野　仁

レクチャー・コンサート（人文研アカデミー）

二〇〇七年一一月二七日　於　本館大會議室

一九一二／一九三九年　二つの「世界大戰前夜」／二つのピアノ・ソナタ　岡田　曉生

ピアノ演奏　お茶の水女子大學准教授　小坂　圭太

漢字情報研究センター講習會

・二〇〇七年度漢籍擔當職員講習會（初級）

第一日（一〇月一日）

オリエンテーション　森　時彦

漢籍について　井波　陵一

カードの取り方―漢籍整理の實踐　永田　知之

第二日（一〇月二日）

工具書について　高井たかね

漢字目錄カード作成實習

第三日（一〇月三日）
目錄檢索とデータベースの檢索　安岡　孝一
漢籍データ入力實習（一）
第四日（一〇月四日）
和刻本について　慶應義塾大學准教授　高橋　智
漢籍データ入力實習（二）
第五日（一〇月五日）
實習解說　梶浦　晉
朝鮮本について　矢木　毅
情報交換・質疑應答　井波　陵一
・二〇〇七年度漢籍擔當職員講習會（中級）
第一日（一一月五日）
オリエンテーション　森　時彥
經部について　古勝　隆一
叢書部について　山﨑　岳
叢書と漢籍データベース　安岡　孝一
第二日（一一月六日）
史部について　宮宅　潔
漢籍データ入力實習（一）
第三日（一一月七日）
子部について　武田　時昌
漢籍データ入力實習（二）
第四日（一一月八日）
集部について
人間・環境學研究科准教授　道坂　明廣
漢籍データ入力實習（三）
第五日（一一月九日）
實習解說　梶浦　晉
現代中國書について
神戸大學大學院人文研究科准教授　濱田　麻矢
情報交換・質疑應答　井波　陵一

所員動靜

○佐野誠子助手（東方學研究部）は、辭任の上（三月三一日付）、和光大學表現學部講師に就任。
○教育組織の制度改正により助教授から准教授に、助手から助教に名稱變更。（四月一日付）
○金文京教授（東方學研究部）を當研究所長（四月一日～二〇〇九年三月三一日）に併任。
○森時彥教授（東方學研究部）を附屬漢字情報研究センター長（四月一日～二〇〇九年三月三一日）に併任。
○立木康介大學院人間・環境學研究科助手は、當研究所（人文學研究部）准教授に昇任。（四月一日付）
○伊藤順二准教授（人文學研究部）を採用。（四月一日付）
○石川禎浩准教授（東方學研究部）を附屬現代中國研究センターに配置換。（四月一六日付）
○RACHAUD, Francois フランス國立極東學院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇八年三月三一日）。
○森時彥教授（東方學研究部）を附屬現代中國研究センター長（四月一六日～二〇〇九年四月一五日）に併任。
○小池郁子助教（人文學研究部）を採用。（五月一日付）・小林善文　神戸女子大學文學部教授は、特任教授（五月一〇日～九月三〇日）
○VITTA, Silvio ローマ大學教授は、客員教授（文化研究創成研究部門、七月一日～二〇〇八年三月三一日）
○袁廣泉　大學共同利用機關法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附屬現代中國研究センター、一〇月一日～二〇〇八年三月三一日）
○坂本優一郎助手（人文學研究部）は、二〇〇七年一月一日大阪發、メトロポリタン・アーカイヴズに於いて年金證券關係資料の調査を行い、一月五日歸國。
○中西裕樹助手（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一月一八日大阪發、香港中文大學に於いて言語接觸に關する資料收集、第七回國際客家方言檢討會出席及び研究發表を行い、一月二一日歸國。
○高田時雄教授（東方學研究部）は、一月二一日大阪發、クラコフ大學に於いてクラコフ大學ヤジェロンスカ圖書館所藏漢籍の調査研究を行い、一月二八日歸國。
○田中雅一教授（人文學研究部）は、一月七日大阪發、コロンボ市内に於いてマイノリティについての調査を行い、シンガポール市内に於いてインド系マイノリティ研究についての調査を

行い、二月二日歸國。

。田中淡教授（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、二月二日大阪發、板橋林家花園に於いて中國造園史・園藝史に關する實施調査、自然科學博物館に於いて中國農業史に關する資料調査、彰化孔廟、鹿港民族文物館、龍山寺、天后宮に於いて中國生活文化史に關する資料收集を行い、二月六日歸國。

。稲葉穰助教授（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一月二九日大阪發、大英圖書館に於いて中央アジアにおける宗教史についての資料調査を行い、オクスフォード大學に於いて研究打合せを行い、二月八日歸國。

。高井たかね助手（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、二月二日大阪發、板橋林家花園に於いて中國造園史・園藝史に關する實施調査、自然科學博物館に於いて中國農業史に關する資料調査、彰化孔廟、鹿港民族文物館、龍山寺、天后宮に於いて中國建築史・生活技術史に關する實地調査、中國家具博物館に於いて中國家具史・生活技術史に關する資料收集、國立歷史博物館に於いて中國生活文化史に關する資料收集、國立故宮博物院に於いて「開創典範 ― 北宋的藝術興文化」檢討會に出席及び中國生活文化史に關する資料收集を行い、二月八日歸國。

。曾布川寛教授（東方學研究部）は、二月六日大阪發、臺北市内に於いて中國美術に關する調査・資料收集、故宮博物院に於いて北宋藝術と文化檢討會に出席、中央研究院歷史語言研究所に於いて中國美術に關する調査・資料收集を行い、二月九日歸國。

。田邊明生助教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一月三一日大阪發、ウトカル大學及び市街地と近郊村落に於いてインド・オリッサにおける人種とカーストの現代的表象に關する研究を行い、ペラデニヤ大學等に於いてスリランカの宗教實踐における人・モノ・言葉のネットワークの研究を行い、二月一九日歸國。

。岡田曉生助教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月一二日大阪發、ナポリ音樂院圖書館に於いて一八世紀イタリア・オペラの資料調査を行い、バイエルン國立圖書館に於いて第一次大戰閒の音樂雜誌の調査を行い、二月一九日歸國。

。森時彦教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月一七日大阪發、常州市及び近郊に於いて中國縣制に關する現地調査を行い、二月二一日歸國。

。水野直樹教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月一七日大阪發、成均館大學、鎭安郡歷史博物館等に於いて資料調査を行い、二月二三日歸國。

。安岡孝一助教授（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、二月一二日大阪發、ロサンゼルス公立圖書館、サウスパサデナ公立圖書館、オハイオ歷史協會、ニューヨーク公立圖書館、アメリカ議會圖書館、ニューヨーク歷史協會に於いて文字コードとキー配列に關する所藏調査を行い、二月二五日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、二月一九日大阪發、ロシア科學アカデミー東洋學研究所に於いて敦煌寫本他の調査研究を行い、二月二六日歸國。

。高木博志助教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月二六日大阪發、ソウル國立中央博物館に於いて博物館展示と所藏文書調査及び比較史研究を行い、二月二八日歸國。

。中西裕樹助手（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月二一日大阪發、香港城市大學に於いて研究打合せ、資料收集及び研究の總括を行い、惠東縣大湖洋村に於いて舊正月の祭りと言語の調査を行い、三月二日歸國。

。田中雅一教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、二月二二日大阪發、スタンフォード大學に於いて文獻收集を行い、陸軍歷史研究所等に於いて文獻收集及び軍隊の歷史人類に關する文獻收集等を行い、三月三日歸國。

。石川禎浩助教授（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、二月二八日大阪發、四川省檔案館、四川師範大學に於いて中國社會主義運動に關する資料調査を行い、瀘定橋記念館、紅軍強渡大渡河遺址、和平村日虜記念館、周達文故居、黎平會議會址記念館、中共一大會址記念館に於いて中國革命史舊跡の調査を行い、三月一〇日歸國。

。籠谷直人教授（人文學研究部）は、受託研究費により、三月一三日大阪發、中央研究院に於いて華僑についての資料調査及び研究會への參加を行い、三月一六日歸國。

。田中雅一教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、三月一〇日大阪發、ムンバイ市内に於いて都市文化についての調査を行い、デェンナイ市内に於いてヒンドゥー文化の調査を行い、三月二一日歸國。

。冨谷至教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、三月一五日大阪發、國立博物館に於いて東アジア考古文物の調査、その後、日本學術振興會經費により、ミュンスター大學等に於いて二國閉共同研究に關する研究打合せ等を行い、再度、文部科學省研究費補助金により、ライデン大學に於いて研究打合せを行い、三月二六日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附屬漢字情報研究センター）は、二月二六日大阪發、中央研究院歷史語言研究所に於いて唐代研究ナレッジベースのための研究打合せと資料收集を行い、三月二八日歸國。

。竹澤泰子教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、三月一三日成田發、アメリカ人類學會に於いてアメリカ人類學專門家會議「人種と醫療」に出席、全米日系人博物館、サンフランシスコ州立大學等に於いてアジア系アメリカ人アーティストにインタビューを行い、マサチューセッツ工科大學において「人種と科學」の會議に出席、四月三日歸國。

。立木康介准教授（人文學研究部）は、京都大學教育研究振興財團助成金により、平成一八年一一月五日大阪發、Centre psychanalytiq ue de consultations et de traitements に於いて「現代の心理的症狀に有效であり、社會的ニーズにも對應する、精神分析治療の技法、理論、倫理を求めて」の研究に從事、四月一六日歸國。

。船山徹准教授（東方學研究部）は、日本學術振興會經費（一部先方負擔）により、四月一七日大阪發、オーストリア科學アカデミーに於いて早期漢譯佛典シンポジウムに出席し、四月二三日歸國。

。藤井正人教授（人文學研究部）は、四月一九日大阪發、ライデン大學に於いて南インド・サンスクリット寫本ワークショップに參加し、四月二三日歸國。

。船山徹准教授（東方學研究部）は、四月二四日大阪發、上海師範大學に於いて中國佛教に關する講演會と討論會に出席し、四月二八日歸國。

。ウィッテルン，クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、四月一九日大阪發、オスロ大學東洋學研究所に於いてナレッジベースとＴＬＳについて研究打合わせ、Harnackhaus に於いて「ドイツにおけるＴＥＩプロジェクト」ワークショップに出席、研究報告を行い、ベルリン科學院に於いてＴＥＩ技術評議委員會會議に出席し、四月三〇日歸國。

。冨永茂樹教授（人文學研究部）は、四月二二日大阪發、國立東洋語學院及び國立圖書館に於いて研究資料收集等を行い、五月七日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、五月九日大阪發、ハイデルベルグ科學院に於いて「中國石刻佛典」計畫について研究打ち合わせ等を行い、五月一四日歸國。

。籠谷直人教授（人文學研究部）は、五月一七日大阪發、中正國際記念館に於いて國際學術檢討會「全球化與華僑華人問題的轉變」で報告を行い、五月二〇日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、五月一六日大阪發、The British Academy に於いて國際會議「A hundred years of Dunhuang, 1907–2007」に出席、The British Library に於いて表音文字書寫中國語文獻の調査を行い、五月二二日歸國。

。加藤和人准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、五月一九日大阪發、Palais des congres de

Montreal に於いて Public Population Project in Genomics（P3G）に出席及びゲノム疫學研究についての資料收集等を行い、五月二五日歸國。

○藤井正人教授（人文學研究部）は、五月二三日大阪發、テキサス大學オースティン校に於いて第4回國際ヴェーダ學ワークショップ出席及び論文發表を行い、五月二九日歸國。

○曾布川寛教授（東方學研究部）は、五月二六日大阪發、内蒙古考古研究所・内蒙古博物館、承德市文物局、故宮博物院に於いて中國美術の調査及び資料收集を行い、六月一日歸國。

○稲葉穣准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、五月二二日成田發、IsIAO及びローマ大學及びナポリ東洋大學に於いて中央アジア宗教史に關する資料調査及び研究打合わせ等を行い、六月四日歸國。

○石川禎浩准教授（附屬現代中國研究センター）は、共同研究費（一部先方負擔）により、六月五日大阪發、フランス社會科學高等研究院に於いて現代中國研究についての研究打合せ及び國際學會"Mao as an Historical Subject"に參加、オックスフォード大學に於いて現代中國研究關連資料調査、バーミンガム大學に於いて現代中國研究についての研究打合せを行い、六月一四日歸國。

○菊地曉助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、六月一八日大阪發、シュトゥットガルト民族博物館、シュヴァルツバルト野外博物館、ライヒェナウ僧院等に於いて文化的景觀の保全と活用に關する資料調査及び巡檢を行い、六月二五日歸國。

○宮宅潔准教授（東方學研究部）は、七月四日大阪發、淑明女子大學に於いて「中國古中世史學會」に出席及び發表を行い、七月八日歸國。

○高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、七月一六日大阪發、Institute of History, Archeology and Ethnology of the Peoples of the Far East に於いてロシア極東地域所藏漢字文獻の調査研究を行い、七月二三日歸國。

○金文京教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、七月二〇日大阪發、西南大學に於いて「文學遺產」國際論壇に參加及び論文發表を行い、七月二五日歸國。

○古勝隆一准教授（東方學研究部）は、七月二〇日大阪發、上海社會科學院に於いて國際學術討論會に參加し、七月二六日歸國。

○安岡孝一准教授（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、八月一日常滑市發、ウィスコンシン歷史協會、ミズーリ歷史協會、アメリカ議會圖書館、ニューヨーク公立圖書館に於いて文字コードとキー配列に關する所藏調査を行い、八月一三日歸國。

○金文京教授（東方學研究部）は、八月一〇日大阪發、首都師範大學に於いて第六回中國古代小說文獻小說及數字化國際檢討會にて論文發表、韓國學中央研究院に於いて蒙元法律文化及麗元關係史國際學會にて論文發表を行い、八月二〇日歸國。

○竹澤泰子教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一一日成田發、アジア協會及びカリフォルニア大學バークレー校に於いてアジア系アメリカ人の人種表象について調査を行い、八月二〇日歸國。

○池田巧准教授（東方學研究部）は、七月二六日大阪發、中央民族大學、西南民族大學に於いて西南中國の言語に關する文獻調査を行い、康定近郊に於いてムニャ語とリュズ語の調査を行い、八月二三日歸國。

○田邊明生准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一日大阪發、ブバネシュワルおよびプリー近郊に於いて民主化と社會變容に關する現地調査を行い、八月二五日歸國。

○岡村秀典教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一三日大阪發、内蒙古文物考古研究所、固陽縣北魏遺跡等に於いて北魏佛像の調査、内蒙古自治區博物館に於いて資料調査、和林格爾縣に於いて盛樂城遺跡の調査、中國社會科學院考古研究所等に於いて調査成果の意見交換を行い、八月二六日歸國。

○向井佑介助教（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一三日大阪發、内蒙古文物考古研究所、大同市博物館に於いて北魏佛像の調査を行い、中國社

會科學院考古研究所に於いて調査成果の意見交換を行い、八月二六日歸國。

。山室信一教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一六日大阪發、大英博物館、オクスフォード大學、ライデン大學に於いて近・現代ヨーロッパにおける空間の構築と表象の實態調査を行い、八月二九日歸國。

。坂本優一郎助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一六日大阪發、大英博物館、オクスフォード大學、ライデン大學に於いて近・現代ヨーロッパにおける空間の構築と表象の實態調査を行い、八月二九日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、八月二〇日大阪發、中華佛學研究所に於いて佛學情報學ワークショップに出席及び研究打合わせと資料收集を行い、八月二九日歸國。

。石川禎浩准教授（附屬現代中國研究センター）は、共同研究費により、八月二〇日大阪發、上海市檔案館、中山大學に於いて中國社會主義運動に關する資料調査を行い、林則徐記念館、琉球人墓地等に於いて中國革命史舊跡の調査を行い、八月三〇日歸國。

。山崎岳助教（附屬漢字情報研究センター）は、八月一八日大阪發、同安縣林氏祖廟、月港等史跡等に於いて明代紳士に關する資料收集、明代海港・海防遺跡の調査等を行い、九月一日歸國。

。李昇燁助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一九日大阪發、釜山市立市民圖書館、國家記錄院等に於いて植民地期地方自治關係資料調査を行い、九月一日歸國。

。水野直樹教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月三〇日大阪發、金泉市内及び國立中央圖書館に於いて植民地期の神社跡などの現地調査及び資料調査を行い、九月四日歸國。

。森時彦教授（東方學研究部）は、共同研究費により、八月二五日大阪發、近代史研究所・中共中央文獻研究室、四川大學・四川省社會科學院、上海檔案館に於いて中國近現代史に關する研究打合わせ及び資料收集を行い、九月七日歸國。

。高木博志准教授（人文學研究部）は、九月三日大阪發、オスマン文書館に於いて國民國家の比較史の調査を行い、ボアジチ大學等に於いて國民國家比較のシンポジウムに出席、トルコ歷史協會等に於いて研究意見交流を行い、九月九日歸國。

。齋藤智寛助教（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月五日大阪發、大英博物館に於いて敦煌出土文書の調査を行い、九月一二日歸國。

。久保昭博助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月二九日大阪發、フランス國立圖書館に於いて文學理論關連資料調査を行い、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンに於いて文學理論關連調査を行い、九月一三日歸國。

。山崎岳助教（附屬漢字情報研究センター）は、九月九日大阪發、蓬萊閣、天后宮等に於いて明代海神信仰に關する調査及び史的景觀に關する調査を行い、九月一六日歸國。

。立木康介准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月三日大阪發、Ecole Normale Superieure に於いて「精神分析運動の歷史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で据え直す試み」のための資料・文獻收集を行い、九月二五日歸國。

。岡村秀典教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二四日大阪發、中國社會科學院考古研究所及び定州市博物館に於いて北魏佛教遺物の調査及び調査成果の意見交換を行い、九月二七日歸國。

。向井佑介助教（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二四日大阪發、中國社會科學院考古研究所及び定州市博物館に於いて北魏佛教遺物の調査及び調査成果の意見交換を行い、九月二七日歸國。

。藤原辰史助教（人文學研究部）は、京都大學教育研究振興財團助成金により、平成一八年一〇月一日大阪發、ロベルト・ボッシュ財團醫學史研究所に於いてヴァイマル時代からナチス時

代におけるドイツの健康主義（ヘルシズム）に關する研究に從事、その間、文部科學省科學研究費補助金により、國立圖書館、州立圖書館に於いてナチスの人種主義に關する資料調査、市立文書館に於いてナチス收穫感謝祭の人種主義、ヴァイマル末期の農民運動調査の人種主義史料調査、連邦軍事文書館に於いてナチス時代の軍需産業と強制勞働の史料調査を行い、七月二三日一時歸國。八月七日、再出國、ナチ黨黨大會跡、軍事法廷跡等に於いて近・現代ヨーロッパにおける空間の構築と表象の實態調査を行い、九月三〇日歸國。

○麥谷邦夫教授（東方學研究部）は、九月二七日大阪發、中央研究院文哲研究所に於いて「跨文化視野下的東亞宗教傳統」討論會に出席及び資料收集を行い、一〇月一日歸國。

○冨谷至教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二七日大阪發、東國大學校に於いて研究集會を行い、國立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料收集を行い、一〇月一日歸國。

○岩井茂樹教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二七日大阪發、東國大學校に於いて研究集會を行い、國立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料收集を行い、一〇月一日歸國。

○ウィッテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二七日大阪發、東國大學校に於いて研究集會を行い、國立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料收集を行い、一〇月一日歸國。

○矢木毅准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二七日大阪發、東國大學校に於いて研究集會を行い、國立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料收集を行い、一〇月一日歸國。

○古勝隆一准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二七日大阪發、東國大學校に於いて研究集會を行い、國立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料收集を行い、一〇月一日歸國。

○曾布川寛教授（東方學研究部）は、九月二二日大阪發、故宮博物院、チベット自治區博物館等に於いてチベット佛教美術の調査及び資料收集を行い、一〇月二日歸國。

○池田巧准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二五日大阪發、黑龍江大學に於いて第四〇回國際漢藏言語學會に參加、中央民族大學に於いてチベット系諸語に關する資料收集を行い、一〇月三日歸國。

○加藤和人准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月三〇日成田發、Ontario Institute for Cancer Research に於いて國際がんゲノミクスコンソーシアム第一回運營會議に參加し、一〇月四日歸國。

○竹澤泰子教授（人文學研究部）は、一〇月四日大阪發、ワシントン大學に於いて「アジアにおける宗教・エスニシティ」シンポジウムに參加し、一〇月九日歸國。

○大浦康介教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月一日大阪發、EHESS（社會科學高等研究院）等に於いてフィクション研究に關する研究打合わせ及び資料收集を行い、一〇月一一日歸國。

○田中雅一教授（人文學研究部）は、受託研究費により、一〇月二日大阪發、國立シンガポール大學に於いてシンガポールの環境政策についての文獻收集を行い、一〇月一三日歸國。

○稲葉穰准教授（東方學研究部）は、九月二六日大阪發、國立歴史博物館、ペンジケント遺跡等に於いて中央アジア佛教關連遺物調査を行い、一〇月一九日歸國。

○高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月一四日大阪發、Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, Russian Academy of Sciences に於いて敦煌寫本ほか中國文獻の調査研究を行い、一〇月二二日歸國。

○池田巧准教授（東方學研究部）は、一〇月一六日大阪發、Univ. of California に於いて東アジア圖書館開館式典に參加し、一〇月二二日歸國。

○加藤和人准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月二一日大阪發、San Diego Marriott Hotel & Marina に於いて Public Population Project in Genomics

Meetingに出席、San Diego Convention Centerに於いて米國人類遺傳學會に出席及び資料收集を行い、一〇月二七日歸國。

。山崎岳助教（附屬漢字情報研究センター）は、一〇月二六日大阪發、中央研究院、東吳大學、暨南國際大學に於いて「グローバル化の下の明史研究の新視點」學會に參加し、一〇月三一日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一〇月三〇日大阪發、メリーランド大學に於いて國際會議に出席し、一一月五日に歸國。

。高木博志准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一一月一日大阪發、ハーバード大學に於いて國際シンポジウム「日本佛教の研究」に參加、報告及びライシャワー日本研究所の研究會へ參加、ピーポディ・エセックス博物館等に於いてE・モース關係の調査を行い、一一月五日歸國。

。齋藤智寛助教（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、一一月一日大阪發、フランス國家圖書館に於いて敦煌出土文書の調査を行い、一一月八日歸國。

。田中雅一教授（人文學研究部）は、受託研究費により、一一月六日大阪發、シンガポール國立大學に於いて都市の環境問題についてのデータ收集を行い、一一月一七日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一一月一〇日大阪發、蘭州大學敦煌學研究所に於いて敦煌寫本に關する講演と調査を行い、中國國家圖書館に於いて21世紀ＣＯＥ外部評價打合せを行い、一一月十八日に歸國。

。王寺賢太准教授（人文學研究部）は、一一月一九日大阪發、成均館大學及びソウル國立大學に於いて講演及び研究發表を行い、一一月二二日歸國。

。坂本優一郎助教（人文學研究部）は、一一月一六日成田發、ケンブリッジ大學圖書館ナショナル・アーカイヴズに於いて一八世紀イギリスにおける社會的間接資本整備の史料調査を行い、一一月二三日歸國。

。冨谷　至（東方學研究部）は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一一月十六日大阪發、華東師範大學に於いて學術講演會に出席、上海博物館に於いて書寫材料に關する調査を行い、一一月二九日に歸國。

。石川禎浩准教授（現代中國研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、一一月二〇日大阪發、陝西省檔案館及び西北大學社會科學系に於いて中國社會主義運動に關する資料調査及び學術講演及び研究打合わせを行い、陝甘寧革命記念館に於いて中國社會主義文化に關する資料調査、中共中央舊址記念館等に於いて中國社會主義運動に關する資料調査を行い、一二月二日歸國。

。竹澤泰子教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部他經費）により、一一月二八日成田發、マリオットホテルに於いてアメリカ人類學會參加、ニューヨーク州立大學に於いてアジア系アメリカ人へのインタビュー及び國際シンポジウム打合せと資料收集を行い、一二月七日歸國。

。岩井茂樹教授（東方學研究部）は、一二月二日大阪發、中山大學及びオランダ總領事館に於いてInternational Confernce : CANTON AND NAGASAKI COMPARED 1730－1830に參加、學術報告を行い、一二月八日歸國。

。田中雅一教授（人文學研究部）は、受託研究費により、一二月五日大阪發、コロンボ大學に於いて被災地の環境問題についてのデータ收集、研究者との交流を行い、シンガポール國立大學に於いて都市における環境問題についての資料收集を行い、一二月一九日歸國。

。水野直樹教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一二月二五日大阪發、ソウル市内に於いて戸籍（除籍簿）調査に關する打合せを行い、國立中央圖書館に於いて族譜調査を行い、一二月二八日歸國。

外國人研究員

。外村　中　ヴュルツブルク大學東方文化研究所講師
東アジアの古代園林
（文化連關研究客員部門）　受入教員　田中淡教授

期間　二月一九日～六月三〇日
○池上　英子　ニュー・スクール大學大學院教授
封建國家から近代へ ― 德川日本・清代中國・オスマントルコ
（文化生成研究客員部門）
受入教員　高木助教授
期間　三月一日～八月一五日
○齊　東方　北京大學考古文博院教授
ソグクド移民と外來美術
（文化生成研究客員部門）
受入教員　曾布川教授
期間　八月一六日～二〇〇八年二月一五日
○BREEN, John　ロンドン大學助教授
日吉大社の社會史：近世から近代へ
（文化連關研究客員部門）
受入教員　高木准教授
期間　八月一九日～二〇〇八年二月一八日

招聘外國人學者

○ESPOSITO, Monica
道藏輯要の研究
受入教員　麥谷教授
期間　二〇〇六年四月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）
○SMITH, Henry　コロンビア大學東アジア學科教授
日本近代建築史論、講談及び浪曲における赤穂浪士
受入教員　高木准教授
期間　二〇〇六年七月一日～二〇〇八年八月二四日（繼續）
○VOGELSANG, Kai　ミュンヘン大學ハイセンベルグ特別研究員
Studies in the textual and literary criticism of the Tso-chuan (c. 4 thc. BC)
受入教員　ウィッテルン准教授
期間　二〇〇六年一〇月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）
○吳　小安　北京大學　副教授
東南アジアにおける華僑ネットワークと國家形成
受入教員　籠谷教授
期間　一月二日～三月一日
○金　秉駿　翰林大學教授
張家山漢簡「二年律令」の研究
受入教員　冨谷教授
期間　一月一〇日～二月一日
○徐　世虹　中國政法大學法律古籍整理研究所所長
中國法制史に關する資料收集と研究會出席
受入教員　冨谷教授
期間　一月一二日～二月二日
○黃　溢智　香港中文大學助教授
中國文化における基本的心理概念の系譜
受入教員　高田教授
期間　三月一〇日～三月三一日
○王　才強　國立シンガポール大學教授
唐・宋時代における中國および日本の都市
受入教員　田中淡教授
期間　三月一二日～四月二〇日
○崔　佑吉　鮮文大學校國際學部副教授
在日・中國朝鮮族：實態、生活世界・アイデンティティ
受入教員　金教授
期間　四月一日～二〇〇八年二月二〇日
○KARP, Sergey　ロシア科學アカデミー世界史研究所一八世紀研究センターセンター長
二〇世紀ロシアにおける「啓蒙」の理念と實踐についての系譜學的研究
受入教員　王寺准教授
期間　五月六日～五月二一日
○黃　蘭翔　中央研究院臺灣史研究所・副研究員
東アジアにおける禪宗伽藍の特徴と傳播
受入教員　田中淡教授
期間　六月七日～九月一四日
○王　汎森　中央研究院歷史語言研究所・特聘研究員
清代嘉道咸時期的思想
受入教員　森教授
期間　七月一日～八月三一日
○都　賢喆　延世大學校文科大學史學科副教授
高麗後期性理學者の日本觀
受入教員　矢木准教授
期間　九月三日～二〇〇八年八月三〇日

。陳　鴻森　中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館主任
清代學術研究
受入教員　井波教授
期間　九月一五日～一〇月一五日
。余　欣　復旦大學歷史學系副教授
日本所藏博物學漢籍研究
受入教員　高田教授
期間　九月二五日～二〇〇八年九月二四日
。高　啓安　蘭州商學院教授
中國におけるシルクロード飲食文化の研究
受入教員　高田教授
期間　一一月二〇日～二〇〇八年一一月一九日
。鞏　文　中國社會科學院考古研究所副研究員
三～六世紀の裝身具からみた東アジアの文化交流
受入教員　岡村教授
期間　一二月六日～二〇〇八年三月四日

外國人共同研究者

。ESPESSE, Gregoire　中央研究院歷史語言研究所研究員
道教史における『太平經』の再評價
受入教員　麥谷教授
期間　二〇〇六年四月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）
。韓　燕麗
海外華人による文學・映畫作品に關する研究
受入教員　金教授
期間　二〇〇六年四月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）
。SANFT, Charles Theodore
中國前漢時代の禮と法をめぐる學術思想
受入教員　冨谷教授
期間　二〇〇六年四月一〇日～二〇〇八年四月九日（繼續）
。金　麗實
植民地期在滿朝鮮人の生活・文化・ナショナルアイデンティティー
受入教員　水野教授
期間　二〇〇六年四月一五日～二〇〇八年四月一四日（繼續）
。SCHERRMANN, Sylke Ulrike
青島舊藏ドイツ語文獻中の法制關係資料の調査
受入教員　岩井教授
期間　二〇〇六年一〇月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）
。AUGUSTINE, Matthew
朝鮮・沖縄からの越境と日本の境界變貌
受入教員　水野教授
期間　四月一日～五月二五日
。黃　稔惠　臺灣・明道大學日本語學科專任講師
植民地時代の臺灣における日本民俗藝能文化の浸透と展開
受入教員　籠谷教授
期間　八月一日～八月三〇日
。李　丹丹
琉球官話課本語言及清代南方對外漢語教學研究
受入教員　池田准教授
期間　八月一〇日～二〇〇八年二月九日
。王　萌
近代上海における日本人と日本企業
受入教員　籠谷教授
期間　九月一五日～二〇〇八年九月一四日

外國人研究生

。SOLOMON, Deborah
一九二九年光州學生運動
受入教員　水野教授
期間　二〇〇五年七月一日～二〇〇七年八月三一日（繼續）
。SHENDEROVICH, Esther
國際關係における明治期日本の自己表現
受入教員　高木准教授
期間　二〇〇六年四月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）
。朴　眞煥
韓國における良心的兵役拒否を通して見る韓國社會の徵兵制についてのディスコース研究
受入教員　田中雅一教授
期間　二〇〇六年四月一日～二〇〇八年三月三一日（繼續）

。常　雪鷹
日中古典文學の比較研究　受入教員　金教授
期間　二〇〇六年一〇月一日～二〇〇九年九月三〇日（繼續）
。BOAS, Benjamin
日本における麻雀についての研究　受入教員　田中雅一教授
期間　一〇月一日～二〇〇八年九月三〇日
。査　娜
東アジア經濟史　受入教員　石川准教授
期間　一二月一日～二〇〇八年二月二八日

出版物

紀要

東方學報　七九册（紀要第一五三册）
　二〇〇六年九月三〇日刊
人文學報　第九四號（紀要第一五四册）
　二〇〇七年二月二八日刊
東方學報　八〇册（紀要第一五五册）
　二〇〇七年三月二五日刊
東洋學文獻類目二〇〇四年度
　二〇〇七年三月二八日刊
人文學報　第九五號（紀要第一五六册）
　二〇〇七年三月三一日刊
ZINBUN number 三九
　二〇〇七年三月刊

研究報告その他

敦煌寫本研究年報　西陲發現中國中世寫本研究班　高田時雄編
　二〇〇七年三月三一日刊
難波鉦一　松之部抄　文明と言語研究班　横山俊夫編
　二〇〇七年一二月一九日刊
コンタクト・ゾーン　田中雅一編
　二〇〇七年三月三一日刊
所報人文　第五四號
　二〇〇七年六月三〇日刊
漢字と情報　第一四號
　二〇〇七年二月二八日刊
漢字と情報　第一五號
　二〇〇七年一〇日三一日刊
東方學資料叢刊　第一五册
　二〇〇七年三月二〇日刊
漢字と文化　第一〇號
　二〇〇七年三月三一日刊
漢字と文化　第一一號
　二〇〇七年七月三一日刊
漢字文化研究年報　第二輯
　二〇〇七年三月刊
唐代宗教文化與制度　高田時雄編
　二〇〇七年九月二〇日刊
二〇〇五年度東アジア人文情報學サマーセミナー報告書（二〇〇五年九月五日～九月九日實施）
　二〇〇五年一一月刊
二〇〇六年度東アジア人文情報學サマーセミナー報告書（二〇〇六年九月一一日～九月一五日實施）
　二〇〇六年一一月刊
CHISE Conference二〇〇五　報告書（二〇〇五年一〇月一三日～一〇月一四日實施）
　二〇〇七年一月刊
東洋學へのコンピュータ利用　第一八回研究セミナー（二〇〇七年三月二二日～三月二三日實施）
　二〇〇七年三月二二日刊
中國石刻文獻研究國際ワークショップ報告書（二〇〇六年一二月一一日～一二月一二日實施）
　二〇〇七年三月刊
オープン・フォーラム「漢字文化の今　四」報告書―マスメディアと漢字―（二〇〇七年二月一一日實施）
　二〇〇七年七月刊
人文情報學シンポジウム―キャラクター・データベース・共同行爲―報告書（二〇〇七年三月二日～三月三日實施）
　二〇〇七年一二月刊